

# 日本への回帰

第57集 令和三年 合宿教室レポート



大学教官有志協議会  
公益社団法人国民文化研究会

# 日本への回帰

(第五十七集)

——第六十六回全国学生青年合宿教室（東京・関西）の記録——

## はしがき

「天皇陛下には十一月二十三日夕刻から翌二十四日にかけて皇居・神嘉殿で新嘗祭を御親祭になられ、今年秋に収穫された新穀を御親供遊ばされるとともに、御親らも聞き召された。また新嘗祭にあたり、伊勢の神宮に勅使を差遣され、奉幣せられた」

右は『神社新報』（令和三年十二月六日付）が伝へる「聖上新嘗祭を御親祭―夕の儀・暁の儀に出御―」と題された記事の冒頭部である。例年同じやうな紙面を目にするが、前年の年初に始まった武漢発ウイルス禍の感染拡大防止で国全体が翻弄されてゐるかに見える中で、かうした文面に触れると「歴史を貫く折々の祈り」の揺るぎなき確かさに心が安らぐのである。

年が改まつて令和四年のことしも、元日早朝の午前五時半、陛下は神嘉殿南庭に出御されて庭燎の篝火が揺らめくなか「四方拜」に臨まれた。神宮を始め山陵及び四方の神々を遙拝なされて五穀豊穰と国家国民の安寧とを祈念遊ばされた。引き続き宮中三殿にて「歳旦祭」に臨まれて、新しき年の平安を祈念遊ばされた（参照・宮内庁ホームページ及び一月十七日付『神社新報』）。

かかる御祈念のもとで、政治も経済も、その他われら国民は日々万般の活動を展開してゐる

る。さうした中で、「国家国民の安寧」に直接責任を負ふ政治の現実はどうであらうか。当  
面はウイルス禍への種々の対処が優先する課題となつてゐるが、当初は国産マスクの不足と  
いふ「笑ふに笑へない」事態に見舞はれた。ウイルス感染による重症者数を押へ込まうとす  
る政府が広く国民に接種を推奨してゐるワクチンは、なほ海外の製薬会社に依存せざるを得  
ない状況にある。このことはウイルス感染症（伝染病）の世界的な大流行―パンデミック―へ  
の、即ち防疫上の非常事態への平生の備へを怠つて来た結果であつた。

それに止まらず、かねて心ある国民が懸念して来たことに、「国家国民の安寧」にとつて  
欠くべからざる要件の「領土領海の防衛」への不備があつた。取り分け尖閣諸島の領有意図  
を年々露あはにして、その近海をわが物顔で遊弋ゆうよくする中国艦艇へのわが政府の退嬰的な対応が  
あつた。不作為ともいふべきかうした退行的な対中姿勢の根柢に、「国の交戦権は、これを  
認めない」としてゐる〈日本国憲法〉があることは多言を要しないだらう。そもそも〈日本  
国憲法〉とは、国家主権喪失の被占領期に「異邦人たち」（米軍を中心とする占領軍スタッフ）に  
よつて起草されたもので、わが日本の弱体化を意図したものだつた―昭和二十一年十一月三日  
〈日本国憲法〉公布―。

その起草の際、彼ら「異邦人たち」が抱いてゐた理念とは如何なるものであつたのか。改

めて確認しておかう。「米国の初期対日方針」（一九四五年九月二十二日公表）の「第一部究極の目的」の冒頭には、次のやうに記されてゐた。

(イ) 日本国が再び米国の脅威となり、又は世界の平和及び安全の脅威とならざることを  
確実にすること

このやうに第九条において〈戦争の放棄・戦力の不保持・交戦権の否認〉を明文化した〈日本国憲法〉とは、まさに「脅威とならざる（武装解除状態の）日本」を法制化したものと言ふ他はないものだった。ところが、この法文を以て、七十五年後の今日、いまだに政界でも（国会やテレビ番組での与野党論戦を見よ）、教育界でも（教科書の記述及び「平和教育」の実態を見よ）、ジャーナリズムでも（朝日新聞や毎日新聞、NHKなどの大メディアの論説解説を見よ）、好ましきこととしてゐて、そこでは留保することなく「憲法の平和原則」とか「平和憲法」とかといふフレーズが踊つてゐる。「憲法の平和原則」は疑ふ余地のない、不動の原則となつてゐる。

しかし、戦後の歩みを振り返れば、いかに〈戦力の不保持〉を明記した〈日本国憲法〉下にあつたとは言つても、日本列島から戦力が消えた試しは一度としてなかつた。被占領期は米軍が直接日本全土を覆つてゐたし、主権回復後（昭和二十七年四月以降）は、日米安全保障条約によって米軍が駐留して、保安隊（自衛隊の前身）・自衛隊との協力によって「領土領海

の防衛」が図られて来た。ことに昭和三十五年（一九六〇）の安保条約の改定では、旧安保条約になかった駐留米軍の日本防衛義務が明確になった。このことは、米ソ冷戦の渦中であつて中ソの共産主義国家が一枚岩だつた当時であつては、「止むなき良き」選択だつた。しかし、その後も「駐留米軍の日本防衛義務」に頼つたまま、〈日本国憲法〉は一字一句も見直されることなく現在に至つてゐる。

しかしながら、北朝鮮の核開発や度重なるミサイル発射、中国の空母建造や南シナ海・太平洋への進出、占拠したわが北方領土で繰り返されるロシアの軍事演習等々を目にしては、さすがに近年は「憲法の見直し」を口にする国会議員が目立つやうになつた。以前のやうに、大臣が「憲法改正」をほのめかしたただけで追及されて辞任に追ひ込まれることはなくなつた。自民党は「日本国憲法改正草案」を公表するまでになつてゐる。だが、前記のごとく「平和憲法」幻想は各方面に根深く浸透したままである。そのために憲法論議とは言つても、「米国の初期対日方針」の「究極的目的」、即ち〈日本国憲法〉体制を超克した「歴史的な日本国家のあり方」や、真の「国家国民の安寧」確保を視野に収めたものからはほど遠い現状にある。〈日本国憲法〉の延長上の論議であつて、伸び伸びとした本格的なものとはなつてゐない。

かつては干戈<sup>かんか</sup>を交へた「異邦人たち」も、国際情勢が転変する中で「脅威とならざる日本」に留まつてゐるかのごときわが国情を心底では奇異な思ひで見えてゐるのではなからうか。中国やロシアはそれを望ましきこととしてほくそ笑んでゐることだらう。北朝鮮工作員による邦人拉致事案や拉致された同胞の救出がままならないところに、悲しきかな「脅威とならざる日本」の国威失墜の実態をまざまざと見る思ひがする。国威なき国家は国民を守れないのである。

右のやうに考へる我らは、累代の先人たちに恥ぢざる生き方を求めてウイルス禍の中にあつた昨年も、工夫を凝らしつつ六十六回目の「合宿教室」を営んだ。本冊子はその研修内容を収めたものである。行間からも私どもの微意をお汲み取りいただけたら幸甚である。

最後にあたり、御懇切なる御講義を賜り、さらには御講義要旨の掲載をお許しいただいた江崎道朗先生に厚く御礼を申し上げます。

令和四年二月十一日

大学教官有志協議会  
国民文化研究会

# 目次

はしがき

## 第六十六回合宿教室〈関西会場〉

講話（七月三日）

輪読で小林秀雄さんに学んだこと

……………元大阪府立芦間高等学校教諭 絹田洋一 ……1

短歌入門（七月四日）

創作短歌全体批評 ……東洋紡（株） 庭本秀一郎 ……21

## 第六十六回合宿教室〈主会場〉

講義（八月二十八日）

国史を貫く皇室の祈り―「大御宝」の理想―

……………筑波大学非常勤講師 伊勢雅臣 ……35



D I M E に基づいて 国際情勢をいかに読み解くか

— Diplomacy (外交) 、Intelligence (諜報) 、Military

(軍事) 、Economy (経済) —

..... 評論家 江崎道朗 …… 61

講話 (追補企画 十月二十三日)

明治神宮の深い「森」

..... 産経新聞社会部編集委員 鵜野光博 …… 97

一年の歩み

— 第六十六回全国学生青年合宿教室と

各地区の定例的な研修活動 — …… 117

合宿詠草抄 …… 147

あとがき

(表紙 山梨県鳴沢村から見た「霊峰富士」)

輪読で小林秀雄さんに  
学んだこと

元大阪府立芦間高等学校教諭

絹田洋一



## 本当にさうだらうか

今回は輪読について体験的な話をしてほしいといふことで、輪読について日頃考へてゐること、輪読を通して考へてきたことをお話ししたいと思ひます。

先日の輪読会で『語り継ごう日本の思想』（国民文化研究会六十年記念出版、明成社刊）所載の「二宮尊徳」の言葉を読んでゐた時でした。

「人、天地の間に生じ、天地の間に物を食ひ、天地の間に住みながら、天地と共に行くべし、天地と共に勤むべし、天地と共に尽くすべし、元來我が身、我が心は天地のものにして我がものにあらず」（『二宮翁夜話』）

「天地」といふ言葉が概念的に感じられ、余り響いてきませんでした。しかしある方が、「私は植物を育ててゐる時、天候など人の力の及ばない天地の力に左右されてゐるのを実感し、この言葉がよく分る気がします」

と言はれたのを聞き、成る程と合点がきました。農業の実践的指導者であった二宮尊徳は、この「天地」の力を日々痛切に感じてゐたに違ひありません。私人では分らなかつたことが、他の方の感想を聞いて得心することができて、輪読の醍醐味を感じました。ただこの時、本当にさうだらうか、当時、西郷隆盛らがよく使つた「天地」といふ言葉には、現在とは違つた深い意味が込められてゐるのではないだらうか、といふ新たな疑念も残りました。かうした疑念は輪読の際にしばしば感じます。なぜいつもこのやうな疑念にとらはれるのか。それは小林秀雄さんの言葉が頭から離れないからだと思ひます。

「とてもわかるものじゃないんだ」

学生時代に初めて輪読した小林さんに関する本は『兄小林秀雄との対話』（高見沢潤子著、以下『対話』）でした。小林さんの文章は難解だと言はれます。独特の言ひ回しも難解に見えるのですが、それ以上に内容が深すぎて得心できないのです。表面的な言葉の意味は理解できても内容が腑に落ちない。言葉が頭に残り、折々思ひ出して考へてもやはり得心がいかない。また考へる。そんな難しさです。小林さんは「人生は難しいものだから、人生につ



いてまじめに考えようとすれば、難しくなるのはあたりまえだろう。私の文が難しいのは、一つはそういうところにある」(『対話』)と言はれます。作品を通してドストエフスキーやゴッホらと対峙し、その精神、心情の軌跡を見極めようとするならば、難解な文になるのは当然でせう。作品に向き合ふ小林さんの姿勢は一貫してゐます。

「まず無条件に感動することだ。ゴッホの絵だとか、モーツァルトの音楽に、理屈なしにね。頭で考えないで、ごく素直に感動するんだ。その芸術から受ける、何ともいいようのない、どう表現していいかわからないものを感じ、感動する。そして沈黙する。この沈黙に耐えるには、その作品に対する強い愛情がなくちゃいけない。

(中略) 絵や音楽がわかるということは、その沈黙に耐える経験をよく味わうことだ。その感動を大切にしてから、それをはつきりさせる。それは批評精神と同じことだよ」

「おれたちは歴史を愛し、歴史を尊敬しなきゃいけない。尊敬することによって、はじめてはつきりと過去の人間が見えてくるんだ。本当の歴史の学び方は、歴史がいろいろなことを語りかけてきて、いろいろな秘密をうちあけてくるようになるまで、じいっと待っていることだね、謙遜に」(『対話』)

絵や文学は、その美しさに感動して「沈黙に耐える」ことが大切であり、そのためには愛情が必要だと言われます。歴史もまた、愛し、尊敬してはじめて見えてくる。それまでじっと待つ。「沈黙に耐える」とはどういふことなのか。なぜ愛情や尊敬が必要なのか。やはり難しいです。しかしこの本は妹の高見沢潤子さんが兄小林さんの言葉を書きとめられたもので、話し言葉である分、多少分りやすいと思ひます。読書についてかう言はれます。

「一流作品はみんな例外なく難しいものと知ることだ。一流作品というものは成熟した人間の感情・思想の表現だからなかなかわかりやしない。大抵の人は名作を読んでみて、

いい加減な段階のところからちよいとのぞいてみて、何もかもわかった顔をしてるけど、それは自分のわかりたいところだけを拾い読みしたことだ。作者のその成熟した感情や思想はもっともつと上の方の段階にあつて、そこまで登つていけないことにはとてもわかるものじゃないんだ。何度も何度もしんぼうして読み返す必要があるんだな。」

「作品は目の前にあり、人は奥のほうにいる。一生懸命に熟読していけば、本が本に見えないで、それを書いた人間に見えてくる。いいかえれば、人間から出て文学となったものを、もう一度人間にかえすことが、読書の技術なんだ」(『対話』)

私たちはこれまで、古事記や正岡子規など様々なものを輪読してきました。初めて原典を讀んで新鮮な驚きを感じたり、逆にあまり響いてこなかったり、様々な経験をしてきたと思ひます。しかし考へてみると、これらはみな歴史に残る一流作品です。そのごく一部分を、たかだか三時間程讀んでどれだけ理解できるのか。輪読のおかげで一人では気付かなかつた点に気付けたとしても、その前で立ち止まり、「ちよいとのぞいて」通り過ぎた程度に過ぎないのは同じでせう。輪読が無意味と言つてゐるのではありません。ただそのことをよくよく自覚した上で、もっと深い思ひが込められてゐるに違ひないといふ謙虚な気持ちを持つこ

とが大切ではないかと思ふのです。「何もかもわかった」と思へばそれ以上深くは考へません。しかし、まだ本当には分つてゐないかもしれないと思へば「何度もしんぼうして読み返し」、考へ続けるでせう。「人間にかえす」まで読み込むといふのは並大抵のことではないはずです。

「何とかして似ようと努める」

学生の頃、輪読や短歌相互批評の時に、先輩、先生方からよく「評論家のやうに距離をおいて批評するのではなく、作者の気持ちになつて、作者の思ひを追体験するつもりで読んでみてほしい」と言はれました。その時は、作者と距離をおいて客観的に分析することも必要なのではないかと考へましたが、皆さんはどう思はれますか。

「宣長がこんなことを言っている。和歌というものは、読んでその意味を知ればいいってもんじゃない、味わうものだ。自分もその難しい、わかりにくい姿になろう、似ることができそうもないその姿に何とかして似よう、ってね。そういうふうにならうと心の内で努めな



ければいけないんだ。ある感情からある言葉が生まれた、その創作活動に心の内で従おうと努力するんだね。こういう気持ちで芸術作品に対することだ。ごくやわらかな気持ちでね」(『対話』)

先程の先輩の言葉と、本居宣長、小林さんの言葉には、通じるものがあるやうに思ひます。「ある感情からある言葉が生まれた」、その活動に「従おう」、そして作品の姿に「似よう」と努めることと、作者の気持ちに心を寄せ、自分も追体験しようとするのは、同じ心の働かせ方ではないでせうか。よく考へれば当然のことかもしれない。作者の感情の動き、深い思ひを正確に知るためには、作者と距離を置くのではなく、自分の方から作者の側に近づき、心を寄せて「似せていく」しかないではありませんか。

数多く出版されてゐる小林秀雄論について、小林さんは「こんなことを書いたって、本人の俺にはさっぱりわからないよ。わかったつもりで書いているんだらうが、俺のことを本当にわかって書いた人は一人もないね。結局は創作だよ。その人の」(『対話』)と言はれます。作者の気持ちと距離をおいて客観的に分析してゐるつもりでも、結果的には自分が解釈し

たいやうに解釈して、作者の真意からかけ離れた「創作」になつてゐるといふことでせう。

「自己流に解釈せず、よくよく見る」

「古典というものを現代に近づけて、現代風に納得しようとするのは、得になるようできて決して得にならない。そのまま味わうことを努めたほうがいい。(中略)作者がどんな人間だったか知るには、作品のあるがままの姿を、自己流に解釈しようとせず、よくよく見るより他にしようがない。『作品の結果の作者をみいだす』—それが唯一の方法だ。古典の作者もそうだけど、歴史上の人物もまたそうだよ」(『対話』)

古典や歴史を学ぶ場合は、さらに注意すべきでせう。私たちは知らず知らず、例へば合理的思考といった現代風なものの考へ方、価値観を通して古典や歴史上の人物を見てしまひます。しかしそれでは現代の自分の側に引き寄せ、「自己流」に納得してゐるにすぎません。「自己流に解釈せず、あるがままの姿を見る」。当然のこのやうですが、これは非常に難しいと思ひます。「よくよく見るより他にしようがない」と言はれますが、現代に生きる私

たちが、現代風なものの考へ方にとらはれず、作品の「あるがままの姿」を見て、「作者や歴史上の人物をみいだす」にはどうすればよいのでせうか。

「無私ヲ得ントスル道」

文芸評論家の佐古純一郎さんが「批評トハ無私ヲ得ントスル道ナリ」と書かれた小林さんの色紙を書斎にかけて自慢されてゐたさうです。高見沢さんがこの色紙の言葉を講演で話されると、「この意味はわからない。自分をなくしてしまつたら批評できなくなるではないか」と反問してくる学生がゐました。批評するためには、まづ対象を客観的に分析、評価する自己を確立する必要がある。誰でも普通はさう考へます。高見沢さんがこのことを小林さんに尋ねると

「私を無にせよと言つてはいない。無私という、よく自在に働く心を得よといっているのです。(中略) 批判する前に、まず積極的に認めるんだよ。無私というのは、相手のあるがままの姿を素直にうけとめて、全部自分をなくして、相手の対象だけはつきりすることか

ら始めることで、それが本当の批評だつていうんだよ。はじめつから非難しようとかか  
つたり、相手をやつつけようと思つて、自己主張をすることを慎めつていうことだ。(中  
略) 批評精神を純粹な形で考えるならば、自己主張はもちろんのこと、どんな立場からの  
主張も極度に抑制するのが批評精神なんだ」(「對話」)

批評するには、まず相手を正確に浮かび上がらせることが重要でせう。その時、先入観や  
偏見が少しでもあれば相手の像は歪んでしまひ、色眼鏡で見ればその色に曇つてしまひます。  
一切の先入観、価値観、立場、主張にとらはれない、自由闊達、融通無碍な心を持たなけ  
れば、「あるがままの姿」を正確に見ることはできない。確かにその通りかもしれませんが、  
全部自分をなくし、あらゆる主張を抑へるなど不可能ではないのか。だからこそ「得ントス  
ル道」と言はれるのでせう。得られるかどうか、到達できるかどうかはわからない。しかし  
何とか「無私」の境地に辿り着かうと歩き続けていく「道」なのだ。小林さん自身も無私  
の境地に到達するのは容易ではない、努力し続けていくしかないと自覚されてゐた、その自  
戒の言葉だらうと思ひます。

「死んだ子に対する母親の悲しみ」

小林さんの名は輪読会で知りましたが、この出会ひは私にとつて特別な意味がありました。私は高校生の頃、日本史の授業が好きでした。複雑な歴史が、数学のやうに明快に理解できたからです。過去を俯瞰して正邪を断じ、未来を見通す神のやうな視点を得た感覚も微かにあったと思ひます。後で考へると、マルクスの唯物史観、階級闘争史観に基づいた授業でしたが、新鮮に感じました。

しかし一方で、全く異なる歴史の面白さも実感してゐました。海音寺潮五郎の評伝『武将列伝』『悪人列伝』を読み耽り、特に楠木正成に心酔しました。圧倒的劣勢にも関はず後醍醐天皇のために拳兵して勝利を重ね、最後まで節を通して従容と死に就く正成の姿が目に見え、一緒に戦つてゐるやうに心が躍りました。利害打算は微塵もなく、天皇に忠誠を尽くす無私な人柄にも惹かれました。ところが高校生の私には、肝心の天皇といふ存在が全く理解できませんでした。授業でも天皇は日本を戦争に導いた元凶と教へられ、信じて疑ひませんでした。正成に強く惹かれながらも、その行動の源泉である天皇が理解できず、逆に否定するしかないといふ矛盾を解決する術がありませんでした。歴史を学ぶとはどういふことなの

か、どちらが本当の歴史なのか、かう思ひ悩んでゐた時に目にした小林さんの言葉は、難解で理解できないながらも深い真理を湛へた言葉に違ひないと感じました。

「今の歴史家は、歴史の客観性だとか、必然性だとか、法則性だとか、やかましくいうばかりで、その心構えは物質に対する科学のように冷たい。歴史をもっとあたたかい目で見なけりやだめだ。過去を惜しむ気持ちで。歴史は決してくりかえさないよ。いったんできてしまったことは、もう取り返しがつかない。だから過去を惜しむんじゃないか。そのできごとが歴史上の事実としてかつてあった、というだけではなく、そのできごとが今もなお感じられるようにならなければいけないんだ。たとえば子どもを失った母親にとつて、子どもが、いつ、どこで、どんな原因で死んだかが問題じゃない。かけがえない子どもが死んだという事実だけが、いつまでも、悲しく、あきらめきれず、心の底に残つてゐるだろう。母親が子どもを愛しているからこそ、死んだという事実が確実になつてくるんだ。歴史ということはそういうことだ。死んだ子に対する母親の悲しみと

同じことなんだ」(『対話』)

それまで目にしたことも考へたこともない、不思議な言葉でした。そのできごとが歴史上の事実としてかつてあった、それで充分歴史と言へるのではないか。なぜ今も感じられなければいけないのか。子どもへの愛情の有無に関係なく、死んだ事實はすでに確実ではないか。なぜ愛情が必要なのか。歴史は母親の悲しみと同じ、とはどういふことなのか。小林さんが書かれた文章も読んでみませう。

「歴史は決して二度と繰返しはしない。だからこそ僕等は過去を惜しむのである。歴史とは、人類の巨大な恨みに似てゐる。歴史を貫く筋金は、僕等の哀惜の念といふものであつて、決して因果の鎖といふ様なものではないと思ひます。(中略)母親にとつて、歴史事実とは、子供の死といふ出来事が、幾時、何処で、どういふ原因で、どんな条件の下で起つたかといふ、単にそれだけのものではあるまい。かけがへのない命が、取返しがつかず失はれて了つたといふ感情がこれに伴はなければ、歴史事実としての意味を生じますまい。若しこの感情がなければ、子供の死といふ出来事の成り立ちが、どんなに精しく説明できたところで、子供の面影が、今もなほ眼の前にチラつくといふわけには参るまい。歴史事実とは、嘗て或る出来事が在つたといふだけでは足りぬ、今もなほその出来事が

在る事が感じられなければ仕方がない。母親はそれを知つてゐる筈です。母親にとつて、歴史事実とは、子供の死ではなく、むしろ死んだ子供を意味すると言へませう。(中略)更に一步進めて言ふなら、母親の愛情が、何も彼もの元なのだ。死んだ子供を、今もなほ愛してゐるからこそ、子供が死んだといふ事実が在るのだ、と言へませう。愛してゐるからこそ、死んだといふ事実が、退引きならぬ確実なものとなるのであつて、死んだ原因を、精しく数へ上げたところで、動かし難い子供の面影が、心中に蘇るわけではない」(『歴史と文学』)

「死」自体は抽象的觀念であり、実体のないものです。すると歴史の中で実際に存在したものは、正確に言へば「子供の死」ではなく、「死んだ子供」といふことになります。歴史事実とは、死や出来事の因果關係といった觀念ではなく、人間そのものではないのか。であるならば、歴史を学ぶといふことは、死や出来事の因果關係といった觀念を理解することではなく、過去の人間が心中に蘇つてくるといふ經驗をすること、と言へませう。「歴史とは、死んだ子に対する母親の悲しみと同じなんだ」とはかういふことではないかと思ひます。



## 歴史と史観

「人間がゐなければ歴史はない。まことに疑ふ余地のない真理であります。ところが、不思議なことには、僕等は、この疑ふ余地のない真理を、はつきり目を覚まして、日に新たに救ひ出さなければならぬのである。唯物史観に限らず、近代の合理主義史観は、期せずしてこの簡明な真理を忘れて了ふ傾きを持つてゐる。(中略)史観は、いよいよ精緻なものになる、どんなに驚くべき歴史事件も限なく手入れの行きとどいた史観の網の目に捕へられて逃げる事は出来ない、逃げる心配はない。さういふ事になると、史観さへあれば、本物の歴史は要らないと言つた様な事になるのである。どの様な史観であれ、本来史観といふものは、実物の歴史に推参する為の手段であり、道具である筈のものが、この手段や道具が精緻になり万能になると、手段や道具が、当の歴史の様な顔をし出す。(中略)人間のゐない所に歴史はない、といふ解り易い真理も、常に努力して、救ひ出す必要のある所以であります」(『歴史と文学』)

史観とは文字通り、後世の様々な学者たちが創作した「歴史の観方」です。マルクスは、

「あらゆる社会の歴史は階級闘争の歴史である。社会は奴隷制から封建制、資本主義、共産主義へと発展し、その変革は階級闘争によってもたらされる」といふ観方をしたので。ソ連崩壊を見るまでもなく、この観方は誤謬だったわけですが、私は高校の授業で、歴史ではなく、この史観を学んだのだと思ひます。地主・資本家階級といった抽象的な言葉は頻繁に聞きましたが、個々の人間の姿が目に浮ぶことはありませんでした。史観は数学の公式のやうに万能で、複雑な出来事も、人間も、具体的にはほとんど何も知らないにも関はず、全て単純明快に理解できた気がしました。一つの観方を全ての出来事、人間に当てはめるだけですから簡単なことです。「自己流に解釈せず、ありのままの姿を見る」、「どんな立場の主義主張も抑制して、柔らかな無私の目で対象を見る」といふ小林さんの姿勢とは正反対であることが分ります。

私は高校時代以降、授業で学ぶ歴史と、評伝を読んで胸が熱くなる歴史と、どちらが本当の歴史なのかと悩んだわけですが、小林さんの言葉を足掛かりに、漸く決着をつけることができました。

天皇についての疑問も解決できました。日本を戦争に導いた天皇は絶対に許せないと思ひこんでゐたのですが、昭和天皇の言動を具体的に調べてみると、事實は正反対でした。張作

霖爆殺事件で田中首相（陸軍大将）を叱責されたお言葉（直後、首相辞任）、満州事変で南陸相を叱責されたお言葉、第一次上海事変で早期停戦を達成した白川大将の遺族に贈られたお歌、二・二六事件で川島陸相を叱責、鎮圧を厳命されたご態度、張鼓峰事件などで板垣陸相を叱責されたお言葉、東条首相就任式での異例のご要望、開戦、及び終戦を決定した御前会議でのご発言など、全てに一貫してゐたのは、軍の暴走を戒め、和平を強く望まれるご姿勢でした。

昭和天皇は戦後、「張作霖事件で田中義一首相への言葉と、二・二六事件でとった態度は、多少憲法から外れたところがあつた」旨の反省のお言葉を述べられました。それ程に軍の暴走を憂慮され、厳しいご態度をとられたといふことです。誤つた史観は、歴史事実を正反對に歪めてゐるのです。昭和天皇と同様、歴代の天皇方も、国民の生活の安寧を祈り続けられる存在でした。天皇を敬ひ、忠誠を尽した楠木正成の心情が、漸く少し理解できたやうに思ひます。そしてこの心情は、日本の歴史の底に流れ続けてきました。西郷隆盛は楠木正成を敬慕して「憶フ君ガ一死七生ノ語。此ノ忠魂ヲ抱ク今在リヤ無シヤ」（『楠公』）と記し、沖永良部島の獄中で「願クバ魂魄ヲ留メテ皇城ヲ護ラン」（『獄中所感』）と記しました。死を覚悟した西郷隆盛の願ひは、死後も魂をこの世に留めて天皇をお護りしたい、といふことでした。

明治維新も、当時の人々のこのやうな心情が源泉となつて成し遂げられたのでせう。私は小林さんから多くの大切なことを学びましたが、最後に、私の胸に残る、美しい小林さんの言葉を紹介します。

「一輪の花の美しさをよくよく感ずるといふ事は難かしい事だ。仮にそれは易しい事だとしても、人間の美しさ、立派さを感ずる事は、易しい事ではありませんまい」

（『美を求める心』）

短歌入門

創作短歌全体批評

東洋紡(株)

庭本秀一郎



皆さん、お早うございます。皆さんから、事前にお詠みになったお歌を提出していただきました。この「創作短歌全体批評」の時間が始まるぎりぎりまで、お一人お一人の思ひを感じながら、私なりに推敲を重ねてみました。「日帰り」の研修といふ時間の制約から、すべてのお歌について触れられないと思ひますが、その点はご容赦ください。

私の推敲（添削）案は、あくまでも私が皆さんの短歌から受け取った思ひを表したものですから、独り善がりである可能性もあります。後ほどの「班別」の「短歌相互批評」の時間に、皆さんでお互ひに作者の思ひに迫りながら言葉を磨きあげていくためのたたき台と考へていただければと思ひます。

（※歌の原文の仮名遣ひはママ）

新しい仕事を始めるにあたって

枚方市 中村隆仁

最適なお客様のおもてなし 健康安心 安全運転

バック時は降車目視を心がけ 焦らず慌てず 一問をおいて

運転手としてのおもてなしのあり方を追求したいといふお気持ち伝はつてきました。

「健康安心」の意味するところは、私の想像で補ひました。また一つの歌にいろいろなものを詠み込むと感動の焦点がぼやけてしまひますので、三首としてみました。

運転手を始むるにあたりて

安らげる車内と安全運転が乗らるる方の望みと思ふ

自らが健やかにあることこそが「おもてなし」なす基もとと思ふ

バック時は降車目視を心がけ焦らず慌てず一問をおかむ

大津市 石部大史

ワクチンで火照る体ぞ何あらむ禍まがに泣かさる人を思へば

ワクチンに禍の終わりを託さんと場を回さるる人を称へる

コロナ禍に苦しんでゐる人のことを思へば、ワクチン接種での発熱ぐらゐは何でもないと  
思はれたのでせう。誰かが泣いてゐられたのを本当に見ての歌でしたら良いですが、泣くと  
いふ言葉はやや大げさな感じがしました。また「場を回さるる」といふ言葉がややぼんやり  
してゐると感じました。石部さんは、感染の危険がある中、早くワクチンが行き渡るやうに  
尽力される、接種現場の方々に対する尊敬と感謝の気持ちを表現したかったのではないかと  
想像しまして、「称へる」に代へて「いたつき（労き）」といふ言葉を使ひました。より具体  
的な表現の方が情景が浮びやすく、思ひが伝はります。

ワクチンで体火照るも気にならじ禍まがに苦しむ人を思へば



ワクチンを残さず早く届けんと励む人らのい  
たつき思ふ

京都市 一二三朋子

元始よりあまた国難乗り越えし国柄思はる今  
ぞ再びと

コロナ禍に改めて知る当然と思ひしことの稀  
有なる幸を

乃木大将語り継ぎなむ世世を経て功の奥なる  
大和魂

一筋に生きたればこそ迷ひなく命も賭せり君  
の御ためおん

昭和帝「院長閣下」の薫陶か民慰むる旅路遥  
けし

乃木大将のご事跡を偲びつつ後世に伝へたいと  
いふ強い思ひが伝はってきました。一首目は下の



句の語順を整へてみました。短歌を詠む際の原則に「一首一文」といふ言葉がありますが、一首が一文としてすつきりと心地よく読み下せるやうに詠むとの趣旨です。二首目は「幸」といふ言葉がやや大きすぎるやうに思ひました。三首目の「世世を経て」「大和魂」はその意味をもう少し絞り込むと、作者の思ひがより強く伝はると思つて、次のやうにしてみました。

元始よりあまた国難乗り越えし国柄今ぞ再びと思ふ

コロナ禍に改めて知る当然と思ひしことの稀有なることを

乃木大将の功に感ずる魂を語り継ぎなむ後の世代へ

一筋に生きたればこそ迷ひなく殉じたまひき君を慕ひて

昭和帝「院長閣下」の薫陶か民慰むる旅路遙けし

彦根市 轟晃成

囲炉裏にて友と語らふひと時に静かな熾火おきびにやすらぎ覚ゆ

熾火といふ言葉で、友との静かで和やかな語らひの時間を表したのだからと思ひました。他方で、この歌の感動の焦点が、熾火、友、語らひのいづれにあるのかがやや分りづらいつ感じました。語らひに安らぎを感じられたのだからと想像し、直してみました。

友どちと囲炉裏の熾火わきび囲みつつやをら語らふひと時安し

神戸市 藪田美浩

一回目のコロナワクチンを打ちに近所の町医者に行った時

病院で コロナワクチン 待つ人は 皆老人に見ゆ 俺も同じか

病院に同じ年代の方々が接種に来られてゐるのを見て、はたとご自身を客観視された一瞬間の心の動きが伝はつてきます。詞書（ことばがき…前書きとして、その作品の動機・主題・成立事情などを記したもの）があるので、分りやすいと思ひます。最初の中村さん、次の石部さんのお歌もさうですが、短歌では句と句の間には空白を入れません。空白を詰め、言葉を整へて一文の形にしてみました。

病院でワクチン待てる人々の如くに我も老いしかと思ふ

大阪市 板西雅代

年ごとにいとしくなりし舅ともつひに別れの時ぞ来たれり

高齢の人々送りもの悲し時代の流れしみじみ思ふ

子を持ちて今に至れる自分知り親を看取りて死に至るを知る

一首目は、「年ごとにいとしくなりし」「つひに」、「ぞ」で始まる強調の係り結びから、強

い哀惜の思ひが感じられます。結びは、連体形の「来たれる」となります。二首目、三首目には、板西さんの様々な思ひが凝縮されてゐるのだらうと感じられました。高齢の「人々」とは、誰なのか、時代の流れをしみじみ思ふとはどのやうなお気持ちなのかと思ひを馳せました。また、子をもって「今に至る自分」を、親を看取って「死に至る」ことを知ったご体験の内容をもう少しよく伺つて、推敲した方が良いと思ひましたので、ここでは一首目だけ推敲案を示させていただきます。

年ごとにいとしくなりし舅ともつひに別れの時ぞ来たれる

明石市 細谷真人

十歳になりし息子の誕生日に出生の日の記憶を辿りて詠めり

授かりし吾子を抱きたる腕かひなからじわと伝はる温もりの健気さ

出生の前に考へし言葉出でず「あっ軽い」とぞのみ吾発したる

病院の目と鼻の先の居酒屋で一人しみじみ祝杯味はふ

あの日からもう十年も経ちしかと思ひて吾の心満たさる

十年前の出生の一シーンを鮮明に思ひ起されてゐる様子が伝はってきました。詞書も歌にしてみました。また、できるだけ字余りにならないやうに調べを整へてみました。四首目

については、十年前を思ひ起して、心が満たされたとのことでしたが、何に満たされたのかをもう少し掘り下げて、言葉にされると良い歌ができさうに思いました。

十歳になりし息子の誕生日に出生の日の記憶を辿る

吾子抱く腕よりじわり温もりの伝はりて来ぬ健気なるかも

図らずも出でし言葉は「あつ軽い」生れ来る前に考へをりしも

居酒屋で一人しみじみ祝ひ酒味はひたるを忘れかねつも

あの日からもう十年も経ちしかと思ひて吾の心満たさる

○

さて、ここからは学生のころから国文研の「合宿教室」での学びを通じて歌を詠み続けて来られた会員の方々のお歌を私の気づき事項とともにご紹介します。

加古川市 北村公一

母の一周忌を迎へ、かの日を思ひ返して

「お母さん、来たよ」と言ひて手を取ればその手にいまだ温もりありき

常ならば我が呼びかけに目を開けて「来てくれたの」と答ふる母はも

安らかな面輪は眠りたるごとく亡くなりしとは信じかねつも

骨と皮ばかりに瘦せたる母の手のその温もりは忘れ難かり

好物のメロンやスイカを目にすれば見舞ひて食べさせし日々の愛しき

二首目と、五首目の字余りが気になりました。二首目の結びの「も」、五首目の二句目「を」、四句目の「て」はなくても意味が通じるので、字余りに込められた思ひも併せて、「班別」の時間にご検討いただければと思ひました。

豊中市 布瀬雅義

聖徳太子千四百年遠忌記念特別展「聖徳太子と法隆寺」にて

聖徳太子が使はれたと言はれる硯と法華義疏の巻物を見て

目の前の丸き分厚き硯こそ聖徳の皇子みこの使はれしものか

乱れなく文字のならべる法華義疏もこの硯横に書きたまひしか

をちこちに字を直されし跡のあり皇子の考ふ姿かむが偲おもはる

我が師らが長年集ひて注釈をまとめし義疏のこれぞ原文もとしかみ

このわれもいつかこの義疏紐解ひもときて皇子と我が師の御跡追ひたし

三首目の「跡のあり」は、「跡ありて」とされるとすつきりすると思ひました。

神戸市 天本和馬

近くでキジバトの鳴き声を聞く

朝早く声に惹かれて見渡せば電柱の先で声ひけらかす

さ思はば数日前よりキジバトの声クークーと啼きてありけり

昼時には庭のカエデに入り込み姿隠して声張り上げぬ

こはいかに去年造りし古き巢の上に止りてしばし離れず

去年は営巢せし後幾日か二羽で交互に卵あたためしが

天敵に襲はれたるか帰り来ぬ一羽を待ちて長く留まりぬ

何処かへ飛び去りし巢に卵二つ残りてあるも悲しかりけり

こひ願ふこの古き巢に帰り来て卵孵せよ今年こそはと

三首目、五首目、六首目の字余りを以下のやうにすると、解消できると思ひました。

三首目 昼時は庭のカエデに入り込み姿隠して声張り上げぬ

五首目 去年は営巢の後幾日か二羽で交互に卵あたためしが

六首目 天敵に襲はれたるか帰り来ぬ一羽を待ちて長く留まる

父の日

交野市 絹田洋一

社会人になりて家を出し三男より花屋の箱の宅配届きぬ

花なれば母への贈り物ならむとあらためもせずうち捨ておきぬ

父さんへの贈り物ならずや父の日も近づきたればと長男言へり

父の日はいつやも知らず調べたれば六月第三日曜日あす

箱の上の小窓ゆのぞけば小さき葉のあまた見えたり急ぎ開けゆく

三男の送りくれしは盆栽の石抱き楓と感謝のカード

おもしろし木の中程に細き幹のうねり絡みて石を抱きたり

苔の青も鮮やかに見ゆ初めての庭の盆栽にけふも水やりぬ

私の歌も紹介のみさせていただきます。

父の誕生日に寄せて

平成を迎へし頃の父の歳に我もなりしと気づきたりけり

バブル弾け時代の潮目変る中如何に未来を見をりしか父は

宝塚市 庭本秀一郎

最後に、作歌のポイントを四つ申し上げます。それは「素直に」「具体的に」「感動（心の動き）を」「正確に」詠むといふことです。この四つの最初の一文字をつなげて読んでみてください。 「素・具・感・正（すぐ完成）」となりますね。

ご清聴ありがとうございました。



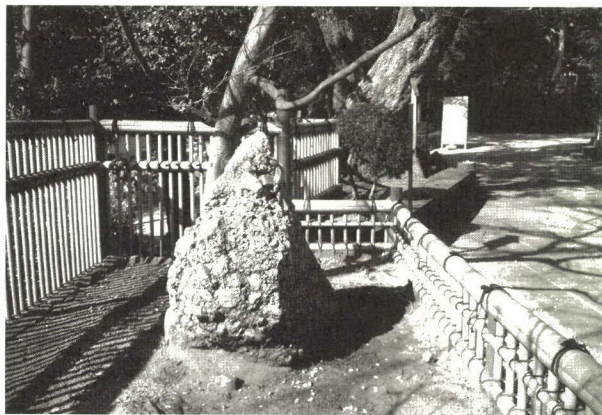
講義

国史を貫く皇室の祈り

—「大御宝」の理想—

筑波大学日本語日本文化学類 非常勤講師

伊勢雅臣



はじめに

—五輪が示した利他の共同体—

自然と祖霊に守られて

「おほみたから」の「二つの屋根」

瑞穂の国作り

氏族国家から公民国家へ

国民一人ひとりが処を得る国に

をはりに

〈質疑応答〉

はじめに——五輪が示した利他の共同体——

武漢発ウイルス感染症の蔓延のために、一年遅れで開催された先の東京五輪（令和三年、二〇二二年七月二十三日、開会式）では日本の選手が大活躍して、金メダルの号外が毎日のやうに出ました。その中で私が特に心を打たれたのが、卓球の混合ダブルスで、伊藤美誠選手とともに金メダルをとった水谷隼選手のコメントです。オリンピックの卓球で日本が中国を破って金メダルをとったのは、これが初めてださうです。水谷選手は試合後にかう語つてゐました。

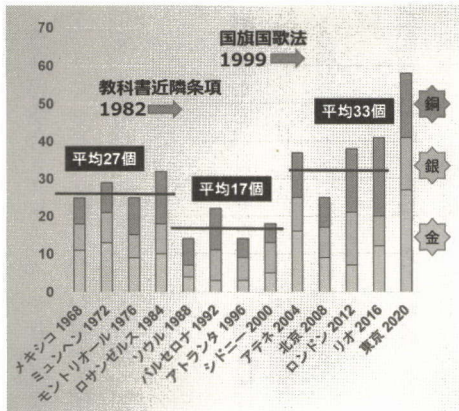
「今までメダルをたくさん取ってきたが銀メダルや銅メダルで、日の丸をてっぺんに揚げる事ができなくて、きょう日本の国旗が一番上に揚がり、君が代を聞いているときはアスリートとして誇りに思った最高の瞬間でした。」（産経新聞、七月二十八日）

オリンピックは選手が国を代表して戦う舞台です。だからこそ勝者を称へるために、その国歌を演奏し、国旗を掲揚します。そして、国のために戦って、国旗を仰ぎ、国歌に聞き入

る、それが「アスリートとして誇りに思った最高の瞬間」だったと言ふのです。ここに個人と国家とのつながりが示されてゐます。

過去のオリンピックでの日本のメダル数の変動を見ますと、面白いことが分ります。グラフは一九六八年のメキシコ大会以降に日本がとったメダル数を、金、銀、銅の合計数で示したものです。これを見ましても今回の東京はものすごい数だったといふことが分りますが、真ん中あたりにへこんだところがあります。平均値で言ひますと、凹んだところの四大会が、平均十七個。その前の四大会が平均二十七個、後が三十三個です。種目数が徐々に増えてゐるので、メダル数も比例して増えるのが当然なのですが、一九八八年ソウルから二〇〇〇年シドニーまで落ち込んでゐるのが不思議です。

これは日本の教育界で起きた大きな変化が原因ではないかと思ひます。一九八二年に歴史





教科書の検定で所謂「近隣諸国条項」が設定されました。日本が中国を「侵略した」といふ教科書の記述が、検定で「進出した」と変へさせられたといふ嘘報がマスメディアで大々的に報じられて大騒ぎになり、あらうことか政府によって「教科書の近現代史に関しては近隣諸国の感情を配慮して書かなければならない」と決められたのです。

その頃までは、戦前戦中を体験された方がまだ多数いらっしゃったので、自虐史観教育もそれほどではなかったのですが、八〇年代になって戦後教育を受けた世代が教育やマスコミの中堅となると自虐史観教育が一気に進みました。その頃に自虐史観教育を受けた中高生が数年後にオリンピックに出場する世代となって、ぐっとメダル数が落ちた、と私は考へてゐます。

当時は、「国のために戦ふ」「応援してくれる人のために頑張る」といふやうなことを言ふと、<sup>ひんしやく</sup>響感を買ふムードがありました。そこで流行<sup>はや</sup>ったのが「オリンピックで楽しんでます」といふ言ひ方でした。

国旗国歌法が制定（平成十一年、一九九九年）されて、「日の丸は国旗、君が代は国歌であり、尊重しなければならぬ」と明記されました。ここからだいたい教育の正常化が進みました。

それにつれて、選手たちの意識も大きく変わりました。たとへば、二〇〇四年のアテネで卓球の福原愛選手がインタビューで「楽しめましたか」と聞かれたときに、「楽しむために来たんじゃないんで、私は」と答へました。前回のリオではレスリングの吉田沙保里さんが決勝戦で惜敗したときに、号泣しながら「たくさんの方に応援していただいたのに、銀メダルに終ってしまって申し訳ない」と語ってゐました。

オリンピックでメダルをとるには大変な練習が必要です。「オリンピックを楽しみたい」といふ利己心では、「ここまで頑張ったんだから、もういいや」と妥協してしまつてメダルに届かないといふやうなことが、ありがちなですね。それに対して「国のために、応援してくれる人々のために、自分がメダルをとつてみんなに喜んでもらふのだ」といふ気持ちを持つと、自分勝手な妥協はできずに、もっともつと頑張れるのです。その結果、良い結果を

出せれば、みな喜んでくれて、それがまた自分も嬉しいといふやうに、利他心と利己心とが繋がった良き循環ができる。これが理想的な共同体の在り方だと思へるのです。

自分がみんなのために頑張る、それによって自分も幸せになる、といふ共同体のあり方は大昔からありました。縄文時代に残る遺跡からも、それが窺はれます。

### 自然と祖霊に守られて

今年（令和三年）七月二十七日に「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に登録されました。そのうちの最大の遺跡が、青森県の三内丸山遺跡です。ここでは茅葺の建物や六本柱で建てた高い塔などが復元されてゐます。大きな茅葺の建物は内部に入ると、バレーボールの試合ができるほどの広さです。六本柱は高さが十六メートルほどもあります。柱を立てた穴の跡が見つかってをり、穴径が二・二メートル、深さが二メートルです。これに直径一米ートルの栗の木を六本、柱として建てたのです。六本柱は何のために建てたのかはこの復元された姿ではわからないのですが、復元模型の一つには茅葺き屋根がかかってゐて、神社の本殿のやうに使はれてゐた可能性があります。

この六本柱を作るためには、四百人ほどの人手が必要だった、とある建築会社は推定してゐます。三内丸山遺跡は人口がだいたい五百人から千人規模とされてゐますから、集落の大人数が集まって、みんなで力を合はせて何年もかけて作ったのだらうと思ひます。共同体のみなが力を合はせると、これほど巨大な建造物もできるのです。

縄文時代はこれだけではなく、他の古代文明とは全く違った特徴があります。世界で最初に定住を開始し、世界最初の土器を作ったといふ二点です。

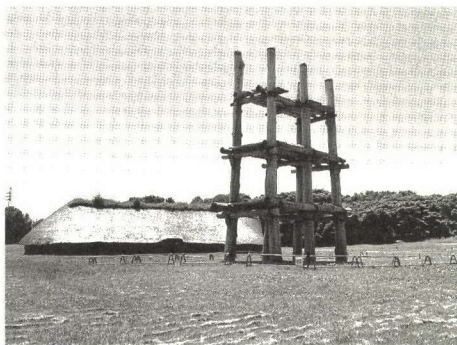
考古学者の小林達夫氏によりますと、古代文明の中で一番古いメソポタミアでは、だいたい一万二千年から一万年前に農耕牧畜が始まり、それによって人類がやうやく定住できるやうになったと考へられてゐます。農耕牧畜の前は狩猟採集ですから、獣をとったり、木の實をとったりして食べます。それでは一ヶ所にあると食べつくしてしまつてまた別のところに移らなくてはならないので、定住はできません。このやうに従来の文明観では農耕牧畜によつて人類は初めて定住できるやうになつて、やうやく文明が始まつたと考へられてゐました。

ところが縄文文明は一万五千年前に定住を開始しました。それも農耕牧畜をせずに、なぜ狩猟採集で定住できたのかといふと、豊かな自然の中で多種多様な食材をいただいて



ゐたからです。遺跡で残つてゐる残滓からは、獣で六十種類以上、魚で七十種類以上、貝は三百五十種類以上、それ以外に様々な山菜や果物が食べられてゐた事が分つてゐます。貝は七十パーセントほどが四月から六月の旬の時期に食べられてゐました。今の我々と同じで、初夏に一番肉が厚くなるので、それをいただいでゐたのです。あまり取りすぎると来年に食べられなくなつてしまふので、持続的に食べられるやうにするためにはどの程度に抑へておかないといけないのか、といふやうなことを考へながら採集してゐました。動物もウサギ、シカ、イノシシなど、他の食物の少ない冬に、成獣しか捕つてゐないので。子供は捕らずに、また来年か再来年大きくなつたらいただきます、といふ配慮をしてゐました。

農耕牧畜といふと技術的に進んでゐるやうに聞えますが、農耕といつても麦を育てるだけなのです。牧畜と言つても羊を飼ふだけなのです。それに比べるとはるかに精密な自然観察や、緻密な工夫がされてゐました。です



から一概に農耕牧畜の方が、文明的に進んでゐるのだといふやうに考へるのは、正しくありません。このやうな緻密な自然観察や工夫があつたからこそ、一ヶ所にゐても食材を食べ尽さないで、定住ができたといふことです。

また縄文時代の遺跡からは、いのちへの感謝と再生の祈りが窺へます。貝塚は今までゴミ捨て場だと教へられてゐましたが、実は「お墓」なのです。貝を食べて、その貝殻に「ありがたうございました、またこの世に戻つてきてください」と祈るお墓なのです。その証拠に、貝殻だけでなく人骨や一緒に暮らしてゐた犬の骨も埋められてゐました。長い間使つてゐた土器も一緒に埋葬されてゐました。そこにすべての動植物にも、道具にも平等のいのちを感じずる日本人の生命観が表れてゐます。

このあたりの感覚は今の我々も継承してゐて、食事の際に「いただきます」といひますよね。「いただきます」といふのは作つてくれたお母さんへの感謝の言葉だけではなく、これからいただく食材の命にも言つてゐるのです。

それからもう一つ。縄文の人たちは先祖の霊に守られながら生活をしてゐました。海への道の両側に、丸く小さな盛つた土饅頭が並んでゐます。これは先祖のお墓なのです。海に行く道の両側に先祖が祀られてゐて、ちやうど遺体が起き上がると、対面で通路を通つてゐる

自分たちに送り迎へをしてくれる形で埋葬されてゐました。漁に行くといふのは非常に危険なことですから、行く際は先祖の霊が「無事に行つてしつかり魚を捕つてきてくれよ」と見送り、帰つてくると「よく無事に帰つてきたな」と先祖の霊に迎えられる、さういふ暮しをしてゐたやうです。

このやうに先祖の霊を身近に感じながら暮していくといふことは我々の生活の中でも残つてゐます。例へば現代でも、大文字の送り火、精霊流し、門松などがさうです。正月も本来は先祖の霊を迎へる時期で、そのお迎へするのが門松です。かういふ形で先祖にお盆とお正月に来ていただいて、ご馳走を振舞つてお送りするといふやうな先祖との親しい接し方は今も続いてゐます。

### 「おほみたから」の「一つ屋根」

このやうに縄文時代の先人たちは豊かな自然と祖霊に守られて、暮らしてゐたのですが、紀元前十世紀くらゐから地球が寒冷期に入り、それまでの豊かな食材が失はれていきます。そこから弥生時代に入っていきます。

弥生時代の遺跡では、吉野ヶ里遺跡が有名です。北九州の紀元前四世紀頃の遺跡ですが、集落を敵から守るために、末端を尖らせて立てた逆茂木で周囲を囲み、さらに水濠、壁、柵と何重もの防備をしてゐます。寒冷化が進んでいくにしたがつて、食物を求めて西日本人に口が移動し、さらに中国大陸での戦乱を逃れた戦争難民が朝鮮半島を経由して日本にまでやってきました。それによって、戦乱の時代になったのです。

古事記や日本書紀にも、「葦原中国は動乱の時代になった」といふことが書かれてゐます。それはこの弥生時代の事を言つてゐるのではないかと考へられます。そこから人々が安寧に暮せる社会をいかに回復するのか、そのための国づくりの努力が続けられます。

まづ日本書紀では天照大神が五穀を見つけられた様子を、次のやうに記述してゐます。

時に、天照大神喜びて曰はく、「是の物は、うつつ顕見しきあわのとくま蒼生の、くら食ひて活くべきものなり」

(坂本太郎他校注『日本書紀上』)

(その時、天照大神はお喜びになって、「これらの物は、実際に地上で暮らしている人民が食べて生活すべきものである」)

そして自ら稲を天狭田及び長田あまのさなだで育てられました。この部分を読みますと、お母さんが赤ちゃんに良い食べ物が見つかって喜んでゐる様子が思ひ浮びます。深い慈愛のこもった言葉です。

天狭田とは狭い田んぼです。長田とは長細い田です。日本の急峻な地形では、平らな広い田んぼはできないので、狭いところを切り拓いて細長い田を作って、そこで天照大神ご自身が稲を育てられたといふことです。

ここを読むと、私は旧約聖書のアダムとイブの話との違ひを感じるのです。アダムとイブはエデンの園といふ楽園で生れ、何一つ不自由ない暮らしをしてゐました。ただ神様は知恵の実を食べるなど理由も言はずに二人に命じました。それを蛇にそそのかされたイブが食べてしまいます。さうすると知恵が身につきました。神様は、言ひつけを破ったといふことで、怒って二人を追ひ出します。アダムとイブは楽園から追放され、それから額に汗して地を耕して食べ物を得ないといけない時代になりました。ちょうど狩猟採集の時代が去って、農耕をしなければ生きていけない時代になったのです。そこでの労働とは神様の罰と捉へました。日本神話の天照大神の慈愛とは、なんとといふ違ひだらうと思ひます。

日本では、天照大神の慈愛により、人民が五穀を育てて生活する事ができるやうになります。

した。そのあと乱れた世の中を治めるためには国家が必要だといふことで、神武天皇の東征になったのです。東征といつても、戦つてばかりゐたわけではなく、唯一戦ひが記録されてゐるのは近畿地方に入った時の長髓彦ながすねひこなどの土豪との戦ひのみです。それまでは各地に寄港しながら、土地の豪族と婚姻関係を結んだりしながら、平和的に東に向はれたのです。

近年の考古学的研究で、面白いことがいろいろと見つかつてゐます。日本書紀にはかうあります。

方に難波崎なだほのみざきに到るときに奔き潮有りて太だ急はなはきに會ひぬ。……流而上りて、徑ただに河内國の草香邑青雲白肩之津に至ります。

大阪平野は二、三千年前には潟をなしてゐて、満潮時には海水がどつと入り込んでゐたといふことが分つてゐます。神武天皇の船団が「奔き潮はなはなみ」に乗つて、生駒山の麓に着いたといふのは、この時代の地形に合致した記述です。しかし、記紀が書かれた千三百年前には、さらに海面が下がつて潟は湖となり、船で満ち潮に乗つて入り込むのは不可能になつてゐました。

記紀は朝廷の權威を高めるためのフィクションだったなどという説がありますが、その作者が、数百年前の地形を知ってゐて、それに併せて物語を作ったとは到底考へられないのです。やはり東征に関する何らかの史実があつて、地形が完全によつても、その記憶が英雄譚として言ひ伝へられてきたと考へられます。

この後、神武天皇の建国宣言が発せられます。

つつし恭みてたかみくら寶位に臨みて、おほみたら二元元をしす鎮むべし。

：：然して後に、くじのち六合を兼ねて都を開き、あめのした八紘をおほ掩ひていへ宇にせむこと、亦よ可からずや。

(坂本太郎他校注『日本書紀上』)

謹んで尊い位につき、人民を安んずべきである。：：その後国中を一つにして都を開き、天の下を掩いて一つの家とすることは、また良いことではないか。

(宇治谷孟『全現代語訳日本書紀上』)

原文では「元元」と書いて、「おほみたから」と読んでゐます。元といふのは中国語で人を表します。ですから漢文では「元元」と書いて、単なる「人々」を意味します。しかし平

安時代に書かれた「日本書紀」の解説書には、これは「おほみたから」と読むのだと注釈されてゐるのです。

日本列島の各地で、様々な部族がそれまで群雄割拠してゐましたが、一つの屋根の下で家族のやうに仲睦まじく暮すことを理想として、神武天皇は国家を創られたのです。日本の建国目的はここにあつた、と日本書紀は語つてゐるのです。

### 瑞穂の国作り

さて、これで国家がやうやくできて、時代は古墳時代に移ります。だいたい二〜五世紀くらゐまでです。この時代に古墳が作られ、その中で一番大きいのが第十六代の仁徳天皇陵です。全長は五百二十五メートルに及び、盛り土は十トントラックで二十五万台分、これがまた世界遺産になつてゐます。

仁徳天皇陵はエジプトのピラミッド、秦の始皇帝陵と並んで、世界三大墳墓とされてゐますが、この二つは面積ではまったく比べ物になりません。また秦の始皇帝は、自身の陵と万里の長城の原型を作りましたが、苦役に使はれた人民が反乱を起して、秦の国は二代で滅び



てしまひます。

それに対して日本では仁徳天皇陵の築造前後にも続々と古墳が築かれてゐます。大きさは仁徳天皇の前の十五代応神天皇陵四百二十五メートル、仁徳天皇の次の十七代履中天皇陵三百六十五メートルと続き、全国では小さな古墳も含めると、なんと十六万基も作られてゐます。十六万基といふと古墳時代四百年間で毎年四百基づつ造られてゐたことになります。なぜこんなにたくさん造り続けたのでせうか。

これだけの長期間、巨大な規模や大きな数の古墳を造るには、当時の人々に「喜んで造らう」といふ気持ちがないと無理でせう。それは何だったのでせうか？

仁徳天皇陵の周囲は三重の水濠で囲まれてゐます。これは稲作のための灌漑の役割を果たしてゐたのではないかと考へられます。仁徳天皇の御代には灌漑工事が数多く行はれてゐます。例へば、日本書紀にはかういふ記事があります。

十一年夏四月十七日、群臣に詔みことづかひして、

「いまこの国を眺めると、土地は広いが田圃は少い。また河の水は氾濫し、長雨にあうと潮流は陸に上り、村人は船に頼り、道路は泥に埋まる。群臣はこれをよく見て、溢れた

水は海に通じさせ、逆流は防いで田や家を浸さないようにせよ」といわれた。

(宇治谷孟『全現代語訳 日本書紀上』)

実際に当時の大阪平野は、海が引いて陸地になったばかりの低湿地帯だったので。淀川上流で大雨が降ると、この低湿地帯で氾濫してすぐに洪水になったりしてみました。これでは安定して田畑を作れません。そのあふれた水を海に流すやうに難波の堀江をつくりました。さらに、あちこちに池を造ったり、大溝を掘り、河の水を田に引きました。このやうな努力の一環として、仁徳天皇陵も造られたのです。

ですから当時の人々は、低湿地帯に環濠を掘ってその土で古墳を作り、その御陵の水で安定した稲作を行へるやうにしたのではないかと思ひます。仁徳天皇陵の話だけではなく、その前後の天皇方の御陵にも同様の治水工事の記事があります。

ちなみに全国でのため池の数は二十万くらゐもあるさうです。古墳が十六万で、ため池が二十万ですから、大体同じやうな規模で全国津々浦々にため池と古墳が作られたと考へられます。このやうに古墳時代には我々の先祖が皇室を中心として治水や灌漑を一所懸命に行つて、この瑞穂の国を作ったといふことです。かういふ形で安定して農作物が得られるやうに

なりました。そこから次は政治体制を整へていくといふ段階になります。

### 氏族国家から公民国家へ

六世紀頃には有力な氏族が権力を我がものとし、互ひに勢力争ひをする混乱の時代になりました。この時に登場したのが聖徳太子です。太子はまづ冠位十二階を制定して、今までは有力氏族出身であれば、それだけで出世できるやうな制度だったのを改めて、出身氏族に關らず優秀な人が活躍できるやうに、冠位を与へたのです。これは氏族国家から公民国家へ発展していくための重要なステップでした。

その国内政治の政治理念として太子が制定したのが、十七条憲法でした。その第一条にはかうあります。

「一、に曰く、和なるを以て貴しと為し……」

上和らぎ、下睦びて事を論ふに諧ふときは、事理自づからに通ふ。何事か成らざら

む」

(坂本太郎他校注『日本書紀上』)

上下の者が睦まじく論じ合えば、おのずから道理が通じ合い、どんなことでも成就するだろう。

（宇治谷孟『全現代語訳 日本書紀 上』）

これはとても強い信念です。皆さんもこんな日常経験をお持ちではないでせうか。たとへばクラスで次の文化祭をどうしようかと議論するとき、互ひに自分の意見を通さうとする、まとまるものもまとまりません。さうではなく、和気あいあいと議論すると、みなを知恵が集約されて、よりよいアイデアが出てきます。このやうに我々が日常生活でも経験する集団的創造性の原理を、太子は国家の根底に据ゑられたわけです。

太子の理想をさらに具現化したのが、大化の改新です。唐の制度を参考にして「班田収受法」が定められました。しかし、唐と日本とは、根本的な考へ方の違ひがありました。

唐の均田法では、口分田は十八〜五十九歳以下の男子、すなはち租税負担者のみに与へられ、女・奴・婢には与へられません。一方、日本では満六歳以上の男・女・奴・婢にも、税に関係なく、広さの違ひはありましたが、すべて口分田を与へられました（虎尾俊哉『日本の歴史文庫③奈良の都』）。

唐では「田んぼを貸すから税金を払へ」といふのに対して、日本では「一人一人が生きる

糧を得るための田んぼを与へる」といふ根本的な思想の違いがあります。まさに国民すべてを「大御宝」と考へての制度です。おほみたら

日本史の教科書では混乱ばかりが書かれてゐますが、大きく言ふと奈良、平安前期の約三百五十年間、国家体制が非常に安定し、東北の蝦夷や九州の隼人を除けば概ね平穏な時期が続きました。多少の乱が起きても、それはヨーロッパや中国に比べると、さざ波のやうなものでした。

その後、戦国時代に戦乱は続きましたが、信長、秀吉、家康の努力で天下の再統一が実現し、江戸時代にはまた平和な時代に戻って、経済も大発展しました。アメリカの歴史学者の研究では、江戸時代の日本の平均寿命はヨーロッパ以上だったと実証されてゐます。

ところが、十九世紀になり、西欧の列強は世界を植民地化しようと、つひに日本の近辺まで押し寄せてきました。アジア、アフリカのやうに植民地化されては、国民の安寧を保てません。

国民一人ひとりが処を得る国に

黒船が来航したのが嘉永六年（一八五三）です。これを機に、もう一度、国家体制を皇室を中心とした中央集権に戻す明治維新が敢行されます。それによって国家の総力をあげて、独立を守る体制を目指したのです。そして五箇条の御誓文が明治元年のまだ戊辰戦争の最中に発せられ、目指すべき国家の姿を明治天皇が天地の神々に誓はれました。

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ

（人々の自由闊達な議論から智慧を総合していく）

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ

（人々が心を合はせて、国を治め整へていく）

ここには一人一人が自由に活動しながらも、お互ひに心をも一つとし力を合はせて統一国家を築いていくのだといふ理想が表明されてゐます。これは先ほど述べた、十七条憲法での

「上和らぎ、下睦びて事を論ふに諧ふときは、事理自づからに通ふ。何事か成らざらむ」と同じ人間観に基づいてゐるのです。さらにご誓文の第三条はかう謳つてゐます。

一 官武いっど一途、庶民しよじん二至ル迄、各其志おののヲ遂ゲ、人心うまヲシテ倦うまザラシメン事ことヲ要ス

(官吏や士族は言ふに及ばず庶民に至るまで、各自の志を達成でき、希望を失はないやうにするべきである)

また、五箇条の御誓文と同時に発せられた御宸翰(天皇の国民へのお手紙)には、次の一節があります。

「天下億兆、一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば」

(すべての国民がひとりでもその処を得られない時は、みな私の罪であるので)

これは国民一人一人が志を抱き希望を持って暮せる姿を目指して誓はれた言葉です。ここに謳はれてゐるのは一人一人が自由な独立した国民として、志と希望を持ってそれぞれの場所ところで充実した人生を歩んでいくことで、立派な国ができるのだといふ国家観なのです。

このご誓文から国民の生き活きとしたエネルギーが生み出され、明治維新のわづか五十年後には、日本は世界の五大国の一つにのしりました。それも非白人、非西洋の国としては世界で唯一の近代国家でした。これが世界の有色人種に大きな希望を与へます。かうした世

歴史的な偉業が達成されたのは、やはり一人ひとりを「大御宝」として大事にしながら、その主体的なエネルギーを発揮させていくといふ理想が原動力となったのです。

をばりに

我々が生れ育ったのは、このやうにおほみたから大御宝の理想によつて築かれた国家なのです。日本ほど豊かに安心して暮らしていける国家は世界でも珍しいでせう。そのやうな国を築いてくれた先人に感謝し、今後の子孫のためにその努力を継承しなければなりません。

最後に大御宝の理想の継承に対して私が一番好きな言葉をご紹介します。

「一隅を照らす　これ即ち国宝なり」（伝教大師・最澄）

大御宝の理想を実現するために、国民一人ひとりが志すべき生き方を述べた言葉です。一本一本の「ろうそく」は一隅しか照らせませんが、たくさん集まると部屋全体を照らせます。

我々は大御宝の理想を追求する先祖の努力を継承して、自分自身の持ち場、能力、特性を



以て、どういふふう周囲を明るくしたらいいのか、と考へながら、それぞれの人生を歩んでいくべきだと考へてゐます。

〈質疑応答〉

問 日本は国土が、和をはぐくむことの根幹になつてゐたのではないでせうか。

答 国土の豊かさは重要な前提条件だつたと思ひます。ただ、国土の豊かさがあればどこでも縄文文明のやうな文明ができたかといふと、必ずしもさうではないと思ひます。

日本と同じやうに豊かな土地は世界のあちこちにあります。そして多くの古代民族が自然信仰と祖霊信仰を發達させました。しかし、その中で高度の国家を作り、かつ続けてきたのは我が国だけです。その根本にあつたのは、やはり「大御宝」の理想を掲げて、国家を作り上げた皇室の精神だつた、と考へます。

さう考へると、我々も子孫のために、「大御宝」の理想をしっかりと受け継いで、そのよりよき実現に向けて、それぞれが一本の「ろうそく」として、周囲の一隅を照らしていくべきと考へるのです。

講義

# DIMEに基づいて

## 国際情勢をいかに読み解くか

— Diplomacy (外交)、Intelligence (諜報)、  
Military (軍事)、Economy (経済) —

評論家

江崎道朗



はじめに

—先生は真剣に向き合って下さった—

「DIME」

独立国家としての学問的基盤

『金持ち父さん貧乏父さん』に見る「覇権国家」の発想

日本を属国にするための占領政策

戦後レジュームからの脱却

—「独立国家としての学問」に基づく政治の確立—

はじめに

——先生は真剣に向き合って下さった——

私が日本の国のことを考へるやうになったのは、国文研の先生方のお蔭です。僕は九州大  
学出身で、地元福岡には多くの先生方がいらつしやいましたが、なかでも小柳陽太郎先生  
（県立修猷館高校教諭、のち九州造形短期大学教授）、山田輝彦先生（福岡教育大学教授、のち九州女  
子大学教授）の御二人の先生には本当に可愛がっていただきました。

私が大学二年生の時のことです。所謂教科書誤報事件（昭和五十七年七月、文部省が教科書検  
定で歴史教科書の「中国への侵略」といふ記述を「中国への進出」へと書き換へさせたといふメディア  
の「誤報」をきっかけに、中国、韓国が日本政府に抗議をして来た事件）が発生しました。時の宮  
澤喜一官房長官が八月二十六日に談話を出して、我が国の歴史教科書について今後中国、韓  
国の意向を反映させると述べたのです。これがきっかけになって所謂「慰安婦問題」や「南  
京大虐殺」など、中国や韓国が言っていることが歴史教科書に書かれるやうになって行きま  
した。

私は、その年の夏に日本会議系の学生の合宿で特攻隊の遺書や大東亜戦争について学び、

戦争で亡くなった方々は侵略戦争をしたのでなく、純粹に国のために尽さうとされたことを知りました。国文研の先輩方の遺稿集『いのちささげて』を通じて、先人達がどういふ気持ちで戦争といふものに向って行かれたかを勉強してゐただけに、宮澤官房長官談話に激しい怒りを覚えまして、当時は大学二年生で十九歳でしたが、福岡市の繁華街である天神において一人でハンドマイクを抱へて「宮澤官房長官談話はをかしい」といふ趣旨の街頭演説をしました。

その後、当時の鈴木善幸総理大臣が中国に行つて教科書問題で謝りに行くといふ話があつて、これもをかしいと思つて上京して、自民党本部の前で抗議活動しようとしたら機動隊に極左の活動家と間違へられてポコポコにされました。何で日本の国のことを守らうとした人を貶める総理を自民党や警察は守るのか、と思ひました。

この後、小柳先生のところに行つて、一連の話をして自民党は怪しからんといふ話をしたのです。さうしたら小柳先生が私に「江崎君、思想といふのは豊かなものだよ。君の話を聞いてゐると心がギスギスして来る。心がギスギスするやうな話をしてゐる人間の言ふことに耳を傾ける人がゐると思ふかい」と仰つたのです。私が「いや、だつて、自民党はをかしいではないですか」と言ひますと、先生は「だから、自民党が怪しからんと言つて今の状況は



是正できるのかい。できないだらう。本当に自民党を含めて外交を立て直さうと思へば、人生を掛けてのことであり、そのためには、外交はどうしたらいいのか。何で自民党はかうなってしまったのか。中国は何を狙ってゐるのか。何で韓国に日本は弱いのか。そもそも先の戦争についてどう考へたらよいか。君はさういふことを知ってゐるのかい」と言われました。

要するに、私は特攻隊とか戦歿者の遺書だけを読んで怪しからんと思つてゐるだけで、何も知らない訳です。「何も知らなくて自民党は怪しからんと言つて世の中は変るか。政府自民党は怪しからんといふ暇があるのならばちゃんと勉強し給へ」と、小柳先生は大学二年生の私に対して真剣に向き合つて下さつたのです。有難かつたですね。本

当に有難かったです。十九歳の小生意気な学生に向き合って、きちんと話を聞いて下さった上で、自分がどうしたらよいかといふことまで丁寧にお話をして下さいました。本当に感動しました。

### 素晴らしい先生との出会いが人生を変へてゆく

その後も小柳先生のところに通ったんですが、「昭和史といふものについてきちんと理解しなさい。戦前の、国文研の前の日本学生協会はどいう風なことをやってゐたのか。そもそも何で『大東亜戦争』といふのか。本当は『祖国防衛戦争』といふべきものであったのに『大東亜戦争』としたことには非常に深刻な思想的問題がある。東条英機総理の戦争指導が如何に間違つてゐて、それに対して緒方竹虎や中野正剛がどういふことを言つてゐたのか」といふ形で、戦前の日本はいかに思想的に問題があつたのかといふことについて諄々と私に話して下さいました。

「いや、占領政策で戦前の日本は否定されたのであつて、戦前の日本を取り返すところから始めないといけないのではないか」と言つたら、「江崎君、戦前の日本にも問題は一杯あつたのだよ。そこにもきちんと向き合つて研究をしないとイケないでせう。そこも理解

しないままに戦前はよくて戦後は駄目だったみたいなもの考へ方をしてゐる間は、何も見えて来ないだらう」と言はれて、国文研とその前身の日本学生協会、そして小田村寅二郎先生（国文研の初代理事長）がいかに凄いものだったのかを理解することなしに日本の再建は立ち行かないのだといふことについて力説されました。

それで私が「申し訳ないのですが、先生の言つてゐることはよく分りません。ついてゆけません」と言つたら、「ついて来られる訳ないぢやないか、そんな簡単に」と言はれた。「ついて来られなくていいんですか」「ついて来られないから、ついて来られるやうに必死に勉強して、三十年位死ぬ思ひで勉強すれば僕が言つてゐることが理解できるやうになるだらう」と仰つた。三十年かよと思ひましたね。「そんなに時間が掛るんですか」と言つたら、「三十年くらい勉強を続ければ色んなことが分つてくる。学問といふものは厳しいものだし、でも本当にそれをきちんとやつてゆけば、君は日本の外交や安全保障に対して一定の役割を担ふことができるやうになるだらう。だから地道に勉強しなさい」と言はれました。

小柳先生がもう一つ仰つてゐたのが、「君はものを何も分つてゐないのだから、色んな先生方のところに話を聞きに行きなさい。」「どういふ人に会ひに行つたらよいですか」と言つたら、「山田輝彦先生のところに行つたらいいよ」とのことでした。



それで山田先生の御自宅に行ったら、「何の話だ」と仰るから「靖国神社の問題です」と申し上げると、「何でか」と言はれましたので、「靖国神社は亡くなった方をお祀りするところ  
で大事なところだらうけれども、一方で靖国神社といふものがあることによって、戦争で命  
を捧げることは正しいことだといふイデオロギーを国民に押しつけて、国民を死に追ひやる  
といふものがあるのではないですか」といふことを率直にお聞きしたのです。

すると、山田先生は「君は、靖国神社はどういふ風にして御創建になったか知ってゐるか  
い」とお尋ねになるので、「戦争で亡くなった人を祀るためでせう」とお答へすると、「いや  
さうではない。あれは、明治天皇さまが御創建になったものである。明治天皇さまがどうい  
ふお気持ちで戦死者のことについてお考へになったかを学んだことはあるかい」と言はれた  
のです。

恥づかしながら私は、さうしたことを学んでゐませんでした。そして山田先生は明治天  
皇の御製をいくつかご紹介され、国のため亡くなった方々に、どれだけ濃やかに明治陛下が  
お考へになつていらっしゃるかといふことについて滔々と話をされて、「制度や法律の奥に  
はそれを運用する人の気持ちといふものがある。それがどういふものなのか確認して初めて  
政治は見えてくる。外形的な法律といふものだけで政治を見てはいけない」といふ話をされ

た。

その上で、私が「総理の靖国神社参拝は憲法違反ではないですか」とお尋ねしたら、「目的効果基準といふ最高裁の判例を知ってるかね」と仰るから「知りません」と言ったら、「君はね、さういふことも知らずに僕のところを聞きに来たのかい」とあきれたご様子でした。

山田先生といふ方は、物凄く怖い先生です。それを、生意気な私は「さういふことも知らないから聞きに来たのです。知ってるれば聞きに来ませんから」と言ったものだから、僕の横にゐる仲間が「江崎君、何てこと言ふんだ」といふ顔をしたのですが、山田先生は声に出して笑はれて、「そりゃその通りだ」と仰って、「ワインでも飲まうか」とワインとおつまみを出して御馳走して下さったんです。

国文研の先生方は厳しいけど、懸命に学ぼうと思ってるならば相手をして下さる方達なのです。ものを知らない小生のやうな生意気な若造の言ってることに対して、小柳先生も山田先生も大変にお忙しかったと思ふのですが、それなのに時間を取ってわざわざ相手までして下さって無礼な質問をする大学生にワインまで奢って下さる。その懐の深さ、若い人に対する期待の深さ、さういふものに接して、かういふ学びの空間は本当に凄い。この先生方

には本当についてゆくべきだ、と沁み沁み思ひました。

私は高校時代から、当時のアメリカのレーガン政権の動向、スターウォーズ計画、ソ連のデタント等々を自分で勉強してゐて、クラスメイトとは話が噛み合はず、孤立してゐました。大学生のときに小柳先生、山田先生にお会いして、それがどれだけ救ひだったことか。本当に素晴らしい先生との出会いが人生を変へてゆくといふことを若い人には是非理解して欲しいし、そのためには自分から殻を破らないといけません。

### 私の言論活動の基本

小柳先生は、かういふ話もされました。

「昔は本を読むといふことは、尊敬する先生のを全部筆写する。手で写して、それに対して感想まで書き加へることを『読書』と呼んでゐた。単に眺めることを読書なんて呼ばない。君は、尊敬する先生の本を丸々一冊書き写して、感想を書くといふことをやったことあるかね」

私はやったことはなかったので、小柳陽太郎先生の『戦後教育の中で』と山田輝彦先生の『明治の精神』の二冊を全部書き写しました。丸々一冊書き写してゆくと、上っ面でしかも

のを見てなかったといふことが段々分ってくるのです。

そのことをお話ししたら、小柳先生はそこでニコツとお笑ひになるかといふとさうじゃなくて、「それで、君はそれに対してどう思ったのかね」と仰る。たまには少しは褒めて下さってもいいのぢやないかと思ふのですが、さういふふうには追及されて「自分はおかうかと思ひました」とお答へしたら、「僕の本に八百円か九百円のお金を払ったら、それだけの知識が身に着くと君らは勘違ひしてゐる。八百円、九百円の値段のものであつても、それを書くに当つては、物凄い膨大な研究と時間と労力が掛つてゐる。それを八百円で買へたから簡単に身につけることができると思つてゐること自体が浅はかなのだ」とのお言葉でした。その通りだと思ひました。

私が、小柳先生、山田先生が仰つてゐることを本当に理解しようと思へば、二十年、三十年掛る、といふことも学生の時に小柳先生から何度言はれたことでせうか。さう言はれたものだから、先生から言はれたことをノートに書き残してきました。

そのノートを社会人になつても時間を見ては開いて、ああ小柳先生はあの時こんなことを仰つてゐられたな、このことについてもう少し本を読んでおかう、といふやうに小柳先生、山田先生にいただいた宿題に取り組んできました。

そのノートが結局何十冊もあるのです。それに基づいて『コミンテルンの謀略と日本の敗戦』とか、今回の緒方竹虎に関する『緒方竹虎と日本のインテリジェンス』とかといふ本を書いてゐるのです。だから、学生の時に先生方からいただいた宿題を、何としてでもキチンと形にしなければいけないといふことが、私の言論活動の基本なのです。

先人の凄さに敬意を表するところから学問は始まる

小柳先生からかういふことも言はれました。

「残念ながら君はあまり才能がなく、閃きがあるタイプでもない。だから先人たちが突き当たった課題とか問題を一所懸命に追ふことに人生を掛けた方がよい。下手に自分で問題意識を持って考へたところで、『下手な考へ休むに似たり』で、それよりも先人たちが追ひ求めた課題をキチンと追ふやうにして、そこに人生を掛けた方が、日本の外交・安全保障政策を立て直すのに意味があると思ふ」

そこまでボロクソに言はれて悔しかったのですが、その通りだとも思ひました。三十年間、勉強を続けたところで、小柳先生、山田先生の域に自分が達するとは思へない。さうであれば、小柳先生、山田先生達がやって来られたことを追ひ求めて、その中で自分なりに考へて

来たことを文章化する方が余程国の為になると思ひ直して、愚直にさういふことをやって来ました。

だから私は本を書くときに、先生方が仰ったことについて自分はそれを追って来ただけです、いつも書いてゐます。でも、お蔭で、日本にとって本当に大事なことの為に自分は人生を使ふことができて、いろいろと賞までいただいて有難いことだと思つてゐます。

最晩年の小柳先生に聞いたことがあります。「小柳先生はどうだったんですか」とお聞きしたことがあります。先生は「勿論僕は、三井甲之先生や田所広泰さん、小田村さん達がやって来てゐることの跡を継いできた人間だ」とお答へになりました。小柳先生もさうならば僕なんか小柳先生の跡に続かうとするのは当り前のことです。

さうやって日本の国は、先人の方々が追ひ求めて来たものを後進の者が追ひ求めてゆく中で、課題を解決していつて創つてきた国だと思つてゐるのです。一人の天才が創つた国ではない。先人の方々の志のバトン、といふ言ひ方を私はするのですが、そのバトンを次々に受け継いで来て、日本はこれだけのレベルを培つて来た国だと思つてゐますし、さういふ学びを国文研はキチンとやって下さつてゐる、といふことを若い人には是非とも憶えていただきたい。先人の凄さに敬意を表するところから学問は始まると思つてゐる次第です。

それでは本日の主題に入ります。

米中貿易戦争や経済安全保障といふ形で、軍事だけでなく、経済、貿易、そしてインテリジェンスの面でも国際的な対立、紛争が激化してきています。このようにDiplomacy（外交）、Intelligence（諜報）、Military（軍事）、Economy（経済）、この四つの枠組みを使って国際政治で国益を確保しようといふ議論が近年、浮上してきてゐます。

この四つの頭文字を使ってDIME、ダイムともいわれます。要は総力戦、総合戦、総合国力とか、様々な言ひ方で国家といふものの戦ひには、軍事、経済、外交、インテリジェンスの四つを組み合せたパワーゲームといふものが必要であるといふことです。

さうした議論が、アメリカ、中国、ヨーロッパの国際政治の中でこの十年位出て来てゐるのです。要は、軍事や外交だけの戦ひではなくなつてきています。

ところが、日本の論壇の議論を見てゐると、相変はらず、中国は怪しからん、韓国は怪しからん、偏向マスコミはダメだ、みたいな議論が多い。果たしてそれでいいのでせうか。

例へば、サッカーの試合で勝つためには、相手のチームを研究すると共に、自らのチーム

の技量を懸命に上げていく必要があります。サッカーについての色々な戦略、戦術、コーチング、それから選手の技量を上げるためのもの、食生活の改善、あらゆる方策が必要です。相手チームを批判し、揶揄したところで試合に勝てる訳はありません。

同じやうに、日本の今の月刊誌は、中国、韓国、バイデン大統領、そしてマスコミ、野党等への批判で溢れてゐますが、それで日本の政治がよくなる訳がありません。日本を賢く強くするためには、国際法、インテリジェンス、ゲオポリテイク（地政学）、経済、金融といった学問的な基盤と、それに基づいた政治体制の構築が必要になって来ます。相手を罵倒したところで、それで日本が賢く強くなるわけではないのです。

### 独立国家としての学問的基盤

#### 経済的独立

では、日本を賢く強くするためにどのやうに考へたらいいのか。

先づ、政治的独立、経済的独立、そして精神的独立といふ概念について話をしたいと思ひます。



ルック・イースト（日本に学べ）政策を推進したマレーシアのマハティール総理大臣のブレンだった人にインタビューした時の話です。一九九四年のことですが、彼は次のやうに言ったのです。

「独立には、三つある。政治的独立、経済的独立、そして精神的独立だ。マレーシアは、政治的独立は勝ち取ったものの、経済的独立、精神的独立はまだだ」

「それはどういふ意味ですか」と聞いたら、「宗主国であるイギリスは、我々に対して『マレーシアが近代工業国家になるためには、イスラム教からキリスト教に改宗しなければならぬ。キリスト教国家でなければ、近代工業国家を築くことは無理だ』と言った」といふのです。

マレーシアはイスラム教の国で、近代産業国家になって経済的独立を勝ち取るためにはイスラム教を捨ててキリスト教国家になるべきだとイギリスが言ってきたといふのです。

実際にマックスウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』にあるやうに、資本主義といふもの、近代産業国家といふのは、キリスト教がベースであるといふ学問的議論が世界の主流でした。

この学問的議論に基づいてキリスト教国家圏でなければ近代産業国家は作れない。つまり

マレーシアは、イギリスから独立したのにイギリスの精神的、文化的属国になれ、と言はれ続けた。それに対して学問的に反論できない。この、学問的に反論できないことの辛さは、キリスト教国家でなくて近代産業国家建設に成功した日本人には残念ながら分らない。マレーシアはこのことで本当に苦しむのです。苦しむ中で非キリスト教国家でも近代産業国家は作れないのか、絶望感の中で色々調べた時に、ああさうだ、日本があるぢやないか、と。日本だけがそのことに成功してゐる。その秘密を学ぶことで、近代産業国家はキリスト教国家ぢやないとできないといふ当時の欧米の学問、経済学の枠組みを変へたいといふのがマレーシアの問題意識なのです。

### 精神的独立

マハティール総理大臣のブレインだった人物はまた、次のやうにも言ひました。

「マレーシアはイギリスから独立したが、自前の歴史教科書を作成してゐなかつたので、イギリスが作成した東南アジア史で学ばざるを得なかつた。しかしそこには、イギリスの植民地支配に抵抗して立ち上がった独立の指導者は『反乱者』と書かれてあり、イギリスによるマレーシア支配は文明の進歩の歴史として描かれてゐた。なぜマレーシアにおいて、マレ

ーシアの独立運動の指導者を『反乱者』だと教へなければいけないのか。我々マレーシアは、イギリスの植民地支配に立ち向ったことを正義とみなす歴史観を持ちたいと考へて、日本に学ぶことにした」

これは、大東亜戦争の話です。マレーシアは、マレーシアとしてイギリスの植民地支配に立ち向かふといふ歴史観を打ち立てたい。それはイギリスの精神的属国から脱却したいからです。そのためにどうしたらいいのか。イギリスの植民地支配に立ち向った動きといふものを是としたい。その動きとは何かといったら日本の大東亜戦争の話なのです。マレーシアは、マレーシアの独立を求めてゆく中に大東亜戦争があったといふ話をしてゐるのです。

これは、経済学と歴史学、この二つの分野において、日本に学ぶことによつて経済的独立、そして精神的独立をイギリスから勝ち取りたいといふ学問の話をしてゐるんです。

そこで、「それって独立国家としての学問といふことですね」と言ったら、「お前はいいこと言ふな。その通りだ。『独立国家としての学問』といふものを自分達は取り戻さうと思つてゐる」と答へました。

学問的基盤といふ時に、世界には、独立国家としての学問と、属国としての学問の二つがあると思ふのです。

では、独立国家の学問とはどういふものか。実はこの独立国家の学問の延長線上に、アメリカや中国、イギリスといった覇権国家の学問があるのです。この覇権国家の学問を理解する上でロバート・キヨサキといふ人の『金持ち父さん貧乏父さん』といふ本が参考になります。

『金持ち父さん貧乏父さん』に見る「覇権国家」の発想

ロバート・キヨサキの著書に『キャッシュフロー・クワドランド』といふ本があつて、お金の流れといふ意味で四つの分類に分けてゐる。世の中には四つの人間がある。Employee (従業員)、Self employed (自営業者)、Business owner (ビジネスオーナー)、Investor (投資家) の E、S、B、I の四つの種類です。

このうち E と S は自分が働いてどう稼ぐかを考へる人。逆に B と I は人を働かせてどう儲けるかを考へる人です。

E と S、自分がどう働いて儲けるかを考へる人は、基本的に属国側です。

人をどう働かせて稼ぐかを考へる方は、独立国家や覇権国家であり、特にアメリカや中国は

その発想が顕著です。要は、属国と覇権国家とは基本的な発想が全く違ふことを先づ理解して下さい。

この、ロバート・キヨサキの『金持ち父さん貧乏父さん』は、自分がどうやって金儲けしたかについて書いてゐるんです。だけど、この本は、図らずも英米諸国のやうな覇権国家はどういふ発想であるかを書いてゐるのです。要は世界のリーダーは、相手国をいかに働かせ、いかにコントロールするかを考へてゐる。

この、相手をどうコントロールするかといふことを考へる発想と、自分がどう頑張るかといふことを考へる発想とは全然違ひます。

相手をコントロールしようとする人間は、相手のことを深く知らうとします。企業の経営者は従業員のことをよく知らなければ経営は出来ない訳です。尚且つ従業員が一所懸命働いて稼いで貰へる仕組みを作る人間を経営者と言ひます。

アメリカや中国やロシアは、相手の国をコントロールして、そこからどう儲けるかを考へる国です。米中貿易戦争の時に、デカップリング（分離）といつてアメリカが中国との経済的關係を断つかのやうな話が出てきましたが、基本的にアメリカは中国をどうコントロールして儲けるかを考へてゐる国です。よつて米中の経済關係を分離する訳がありません。

日本の議論が問題なのは、例へば日韓断交と言ふだけで、韓国をコントロールするといふ発想が弱い。中国に対しても同様です。断交なんてできるわけもないのに、断交を叫んで思考停止をしてゐるだけで、実際に中国や韓国をいかにコントロールするのか、といふ難しいが、実際に直面してゐる現実に向き合ふことを避けてゐるわけです。

しかし閉ぢこもつて、自分の国だけのことを考へてゐるだけでは、日本の独立と平和を守れるわけがない。

世界の中での確固たる地位を獲得しなければ独立を守れないと思つたから明治維新を起し、開国と富国強兵を目指したのではなかつたのでせうか。その明治の精神を全く学ばずに、日韓断交だ、鎖国だ、グローバリズム反対だといふ。さうして相手の国をコントロールしようとするエネルギーが弱まつていったら、日本は間違ひなく負けます。

欧米のやり方を日本は受け入れよといふ話をしてゐるのではありません。国際社会の中で日本は世界のルールを作る側に回らなければいけないといふ話をしてゐるのです。この相手を知る覇権国家の学問といふものを、日本は明治からずっと築き上げて来た。ところが、さうした学問が、敗戦後、占領政策によって破棄させられてしまったのです。

## 日本を属国にするための占領政策

一九四五年九月二十二日、アメリカは「降伏後における米国の初期対日方針」を出しましたが、その第一部「究極の目的」には、何でアメリカは日本を占領するのか、その占領の目的は次の二項であるとして次のやうに書いてゐます。

《日本国に関する米国の究極の目的にして初期における政策が従ふべきもの左のごとし。

(イ) 日本国が再び米国の脅威となり、または世界の平和および安全の脅威とならざることとを確実にすること。(ロ) 他国家の権利を尊重し、国際連合憲章の理想と原則に示された米国の目的を支持すべき、平和的かつ責任ある政府を、究極において確立すること》  
つまり、アメリカの目的に従ふ従属政府を確立することが占領政策の目的だったので。そのためにも占領軍は何をやったか。これは日本弱体化政策なんていふ曖昧な言葉で言ふから訳がわからなくなるのです。僕らは独立国家としての仕組み、そして学問を奪はれたのです。

### 自分達が失はさせられたもの

敗戦後の日本に乗り込んできたGHQは一九四五年九月十四日、同盟通信社に業務停止命

令を出します。

同盟通信社とは世界各国に拠点を置く通信社でしたが、実は対外インテリジェンス機関も兼ねてゐました。世界中のニュースを把握するための情報収集組織だったのです。そこで G H Q は最初に、世界中からの情報を収集する部門を潰したわけです。さうやって日本の目と耳を潰したわけです。

次いで十月十五日、治安維持法関連法を廃止し、国内のインテリジェンス関係の組織と法令を全て廃止して、スパイ防止も含めた様々な分野を考察する学問的基盤も全て禁止されます。

十一月三十日、陸軍省、海軍省が廃止されて軍事学、国際政治学などが禁止されます。十二月十五日、神道指令が出され、神話、天皇、伊勢神宮などの神道、国体学など日本はどういふ国なのかを研究する学問を禁じます。

そして十二月三十一日、「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」「修身・齐家・治国・平天下」といふ自分と人生を考へる人生学に関するもの、自分の国の歴史、それから「地理」(ゲオポリティクス、地政学)を禁止します。

要はインテリジェンス、共産主義、軍事、国際政治、神道、神話、国体、修身、国史、か



ういふ独立国家として精神的、経済的独立を果たすために重要な学問的な基盤を、占領軍は占領して僅か三ヶ月で悉く禁じたわけです。

日本を弱体化、アメリカの属国にするためにどういふふうに着領政策をやるのかといふ研究を、アメリカはいつ始めたのかと言へば、なんと一九四二年の二月（パールハーバー攻撃から二ヶ月後）には、シンクタンクと國務省が始めてゐるのです。

この発想がどれほど凄惨なことなのか。といふのもいまの日本に、韓国や中国をコントロールする為にどうしたらいいのか、といふことを研究してゐる部門があると思ひますか。中国は怪しからんと保守系の人達は言つてゐますが、中国を骨抜きにするためどういふ風に中国を占領し、対中政策を実施するのかといふことを真面目に研究してゐる人が日本にゐると思ひますか。「中国は怪しからん」と口先で非難するだけで、しかも「中国は経済的にこれから駄目になっていく」なんてふやけた見通しを持ってゐて、本気で中国と立ち向ふことができると思ひますか。

繰り返しますけれども、これは学問の問題なのです。いま日本に必要なのは、経済や軍事やインテリジェンスやゲオポリティックを使って相手をコントロールしようとする独立国家の学問、覇権国家の学問なのです。そしてこの独立国家の学問、覇権国家の学問を取り戻さ

うとするならば、まず占領政策によって失はれた学問を取り戻さないといけない。

幸ひなことに先人たちは、独立国家の学問、覇権国家の学問を習得し、多くの学問的な成果を残しました。だが、かうした学問的な成果もまた、占領期間中にGHQによって潰されました。

### GHQによる焚書

西尾幹二先生が明らかにしてありますが、昭和三年から昭和二十年九月二日までの十七年間に、二十二万タイトルの刊行物のうち三・五%にあたる約八千点を「没収宣伝用刊行物」に指定し、徹底的に没収して焼いてしまつてゐる、焚書してゐるのです。

ではどういふ書物を焚書してゐるか。

①戦争に関連する本です。シナ事変や三国同盟、日米開戦、マレー・シンガポール作戦など多くの本が没収・破棄された。先の戦争を反省すべきだとよく言はれるが、先の戦争を当時の人達がどのやうに考へてゐたのか、その事実を知る術を全部奪はれてしまひました。

②戦時下の経済に関連する本です。戦争するためには金が必要なのです。その金とロジスティックス、戦争に関する物量をどう生産し、運び、現場に持つてゆくのか。さういふことに

関する国民経済全体に関する本も全て没収し焼いてしまひました。だからロジスティックス、つまり兵站のことを全然今考へてゐない。

因みに日本の自衛隊といふのは今、世界でも冠たる強さを持つてゐます。でも、自衛隊がフルで戦つたとして武器弾薬が何日持つと思ひますか。僅か数日と言はれてゐます。

憲法九条も大事だけど、ロジスティックス（物量）がなければ戦争できない。その物量がないといふことについて誰もちゃんと調べず問題視もしない。何故かといふとロジスティックスの重要性を理解できる人が殆どゐないから。自衛隊の問題は、憲法九条の問題だと思ひこんでゐて、兵站といふところまで考へが及ばないのです。

さらに、③諸外国研究に関連した本が狙はれました。戦前の日本は、現在と比較にならないぐらい世界各地のことを研究してをり、その「知の蓄積」は驚くべきものでした。ロシア、インドネシア、タイ、ミャンマーやインド、中国などの政治情勢や指導者の経歴、歴史、軍事基地や港湾、地下資源を含む地理、文化、宗教、民族構成、隣国との関係などを徹底的に調べてゐました。アフガニスタン問題に関連して、タリバンとISの話が出てゐますが、タリバン、IS、ガニ政権が何で、パシュトゥーン人とタジク人がどう違って、といふ基本的なことを知らずにアフガニスタンがどうのかうのと言つたって意味がない。さういふ膨大な

「知の蓄積」を日本は行つてゐたのですが、これも殆ど没収されました。

そして、④当然のやうに日本文化や日本人の精神文化に関連する本が焚書の対象となりました。例へば『日本精神講座』『皇道哲学』『日本的世界観』『国民精神の大本』といった本が没収されました。

その結果「欧米の文化と日本の文化はどう違ふのか」、「キリスト教と仏教と神道はどう違ふのか」、「欧米の植民地支配と日本の統治はどこがどのやうに違ふのか」、当時の日本人はかうした思想的な課題に正面から取り組んでゐた訳ですが、その「知の蓄積」が奪はれたために、現在の日本人の大半は、欧米の文化やキリスト教と日本の文化・精神とがどのやうに違ふのか、恐らく意識したことさへないほど無惨な状態に置かれてしまつてゐる。これも学問的な基盤の欠落の話です。日本は、占領政策で沢山のを奪はれたわけです。

しかし、これら焚書された本の一部は日本に残つてゐて、ある民間人がそれらをかき集めてくれたおかげで、からうじて読むことができる状態になつてきてゐるのです。

その一部を西尾幹二先生が解説をつけて出版・紹介してくれてゐますが、焚書された「知の蓄積」を継承しようと思へる学者はほとんど存在しません。果たしてそれでいいのでせうか。

## 戦後レジュームからの脱却

—「独立国家としての学問」に基づく政治の確立—

### 画期的な第二次安倍政権による国家安全保障政策の策定

以上、悲観的なことばかり述べてきましたが、希望がないわけではありません。

安倍総理は「戦後レジュームからの脱却」を主張しました。この「戦後レジュームからの脱却」とは、占領政策で奪はれた「独立国家としての学問」（プラス「覇権国家としての学問」）に基づいた政治を確立することだと、私は思っています。

第一次安倍政権が倒れた後、自民党が迷走して民主党政権が誕生した時、保守系の政治家たちが「創生日本」といふ国会議員の政策集団を作り、本格的な保守政権を作るべく政策勉強会を始めました。

その勉強会では、戦後レジュームから脱却するために改めて占領政策と戦後の自民党政治の在り方を振り返り、独立国家としてふさはしい政策を作ってゆきました。その政策集に基づいて第二次安倍政権が取り組んだのが、国家安全保障会議の創設であり、集団的自衛権の行使を可能とする平和安保法制であり、特定秘密保護法でした。

国家安全保障会議とは、前述したDIMEに基づく国策決定の仕組みを新設することを意味してゐます。集団的自衛権の行使とは、国際法と地政学に基づいて同盟国を増やし、中国に対峙する総合的な国家戦略を実施するための法的基盤を整備することでした。特定秘密保護法は、占領期間中に廃止されたインテリジェンス、スパイ取り締まりの法体系を再建することを意味してゐました。いづれも占領中に否定された「独立国家の学問」に基づく政治制度、法律だったのです。

文字通り、独立国家の学問を否定した戦後体制から、独立国家の学問に基づく政治体制へと、抜本的な政治体制の再建を目指したのです。なぜ、そんな無理なことをしたのかと言へば、それはこのまま何もしなければ、日本は米中に挟まれて滅ぼされかねない事態に追ひ込まれてゐたからです。

今から十数年前の二〇〇八年、オバマ米国大統領の時の世界はどうなつてゐたかといふと、「アメリカ・中国」対「日本」といふ構図でした。米中両国が結託し、太平洋を分割しようといふ話が出てゐたのです。現に二〇〇八年にティモシー・キーティングといふ米軍の太平洋司令官が中国に行った時に、太平洋をアメリカと中国で分割しようといふ話が中国側から出されたと、連邦議会で司令官は証言をしてゐます。

その後、この米中による太平洋分割案は、米中による日本搾取案といふ形に発展していきます。具体的には、三菱UFJ銀行やみずほ銀行といふメガバンクの株をアメリカと中国で買って金融面で日本を支配するといふ話です。実際に二〇〇八年九月のリーマンショック以降、日本の株価は低下につぐ低下で、一時期七千円台まで落ちました。さうやって下落した日本の株を中国やアメリカが購入し、金融面で米中による「日本買ひ」が急増します。中国は、日本を軍事的に支配するなんて面倒臭いことはしないのです。金融と経済で、良く働く日本人に安い給料で働かせて、その上前をはねる方が余程中国にとってプラスなのです。

勿論、中国としては、台湾の付属領土とされてゐる尖閣諸島を奪ひに来るつもりです。しかしそれ以外は、日本を軍事的に支配するにはコストが高すぎる。それよりもメガバンクの株を買って金融で支配して、その揚がりを取った方が余程具合がいい。さういふ状況の中でリーマンショックがあり、民主党政権が誕生し、尖閣諸島近海で中国漁船による巡視船への体当たり事件が起り、東日本大震災があつた。この民主党政権の時はもう日本は終りかといふ暗い空気でした。

よって保守陣営は当時、何としてもアメリカと中国による太平洋分割構想に対抗しなければならぬ。アメリカを日本の味方に引き戻しつつ、アジア諸国も日本の仲間に取り込んで

ゆくやうな国家戦略を打ち立て実行しなければならぬ。単に民主党から政権を奪ふだけでは駄目だと考へてみました。

よつて二〇一二年十二月、民主党から政権を奪還した安倍総理は第二次安倍政権発足に際して、セキュリティ・ダイヤモンド構想を打ち出しました。これは後に、自由で開かれたインド太平洋構想となりますが、要はアメリカ、オーストラリア、インド、東南アジアと連携しながら中国に対抗してゆくといふ世界戦略です。

そして省庁を挙げてこの国家戦略を推進するためには、省庁縦割りとなつた現行の政治の仕組みを変へることが必要でした。何故かと言ふと我が国は、省庁縦割りで防衛省、外務省、国交省、総務省、皆バラバラなのです。

そこで、外交、インテリジェンス、軍事、経済、つまりダイムを総合した国家安全保障戦略を打ち出し、省庁を挙げて推進するやうにしなければいけないといふことで、二〇一三年に国家安全保障会議（NSC）、その下に常設の事務局として国家安全保障局（NSS）を新設した。そして国家安全保障戦略を策定して、省庁が省益で動く体制から、国家戦略のもとで各省が動く体制へと変更しようとした訳です。

国家安全保障戦略、即ち省庁縦割りではなく総合的な対外戦略といふものを明治維新以降、



日本はこの時、初めて策定しました。戦前もなかったのです。日露戦争後に策定された「帝国国防方針」はありましたが、これは軍事戦略だけで、外交や経済は含まれていませんでした。

一方、戦後の日本には、独自の国家安全保障戦略はなく、第二次安倍政権まで日本はある意味、アメリカの国家戦略に従ふ国だったのです。そしてアメリカの国家戦略に従ふから自前の国家安全保障戦略を策定し、推進する国へと日本の政治を根幹から変へようとしたのが第二次安倍政権なのです。

一九四五年当時の「降伏後における米国の初期対日方針」に示された《米国の目的を支持すべき、平和的かつ責任ある政府を、究極において確立すること》といふ、アメリカの国家戦略を支持する日本政府といふ戦後の日米関係の在り方を戦後初めて変へたのです。

しかし、その意味を理解できた人は日本に殆どいなかったし、いまま大半の人が理解していません。

### 日本の立ち位置は第二次安倍政権の前と後では大きく変った

それでは第二次安倍政権は自前の国家安全保障戦略に基づいて何をやったのかといふと、

先づ特定秘密保護法の制定です。特定秘密保護法を定めることによって、アメリカや他の国々の軍との間で、インテリジェンス、軍事機密の遣り取りができるやうになった。

次は平和安保法制でした。これは、集団的自衛権の行使を一部可能にするものでした。これは、アメリカ軍以外の国の軍隊とも一緒に動くことができるやうになるといふことで画期的なものでした。

三番目にTPPです。このTPP（環太平洋パートナーシップ協定）を主導することによって中国を除く自由主義陣営の経済ネットワークを作る、といふ仕組みが出来た。

そして特定秘密保護法を制定したことを受けて、アメリカ以外の国とも物品役務相互提供協定（ACSA）を結んでいきます。これは何かといふと軍同士が武器弾薬、燃料や人員の交換を出来るやうにするといふことです。

例へば、日本の戦闘機にオーストラリア軍の兵士が乗れるやうになる。護衛艦「いずも」にアメリカ軍機が発着できるやうになる。アメリカ軍の空母に日本の海自の人間が乗り入れるやうになる。軍艦や戦闘機は機密の塊なのです。

これまでは特定秘密保護法がなかったので、この機密の塊においてそれと乗れなかった。乗っても機密に関するオペレーションルームには入れて貰へなかった。でも、この特定秘密保護

法を作ることによって、アメリカ軍と軍事的な交流や機密情報のやり取りが進んだ。米軍とだけでなく、オーストラリア、イギリス、フランス、カナダ、インドとACSAを締結した。ある意味、軍事機密を共有する準軍事同盟国家が、第二次安倍政権のもとで急増したのです。インド太平洋諸国に対しても、能力構築支援と称して戦前でいふ軍事顧問団の形で自衛官を、カンボジア、フィリピン、ラオス、インド、インドネシア、マレーシア、タイなどの軍隊に派遣してゐるのです。

さうやってTPPを背景に、アセアン、インド太平洋諸国に対する軍事支援を実施することによって、経済的軍事的関係を強化してきてゐるのです。それが、自由で開かれたインド太平洋構想の実態なのです。アメリカに従属するだけで自分の国のことしか考へない日本から、インド太平洋諸国を牽引し、アメリカを引き込む独立国家の日本へと、大きく変りつつあるのです。

さうしてインド太平洋諸国との経済的軍事的関係を飛躍的に拡大させてきてゐるので、トランプ大統領は日本のことを重視せざるを得なかつたし、バイデン政権も重視せざるを得ないわけです。一带一路を掲げてインド太平洋諸国を傘下に置かうとする中国と対峙しようとするならば、日本と組まざるを得ないのです。

このやうに第二次安倍政権の前と後では、国際社会における日本の立ち位置が全く違つて来てゐるわけですが、肝心の国民の側がそれを理解し続けなければ、また、アメリカの従属国家に戻つてしまふことになるでせう。よつて国民の側が外交、インテリジェンス、軍事、経済の四つを組み合はせて国家安全保障戦略を策定・推進することの重要性を理解できるやう、ともに努めていきたいものです。

講話

明治神宮の深い「森」

産経新聞 社会部編集委員

鶴野光博



皆さんはこれから明治神宮の散策ですが、今日は晴れてよかったですね。この季節、境内にはどんぐりがたくさん落ちてゐます。でも皆さん、拾って帰っては駄目ですよ。明治神宮では落ち葉もどんぐりも、森から出た物はすべて森に返してゐます。百年前の造営以来、ほとんど人の手を加へず、森の力だけで大きく発展したのが明治神宮の森なんです。

明治神宮は令和二年十一月一日、鎮座百年の節目を迎えました。私は同年一月から三年三月まで、産経新聞で「100年の森 明治神宮物語」といふ連載を担当しました。今日は、取材を通じて私が深い印象を受けた人の言葉や、資料の文章を紹介していきたいと思つてゐます。よろしくお付き合ひください。

### 明治の「遺跡」

最初は実業家の洪沢栄一の曾孫、洪沢雅英さんの言葉です。九十六歳で、洪沢栄一記念財団の相談役を務めていらつしやいます。栄一は明治神宮の造営に深く関<sup>かかわ</sup>る人ですが、それについては後で説明させよう。

「私は、あの神宮は明治の遺跡だと思っています。お庭は東京で一番きれいだし、国粹主義的でもなく、明治天皇を自然に評価している。外苑の野球場や絵画館なども人々に親しまれている。大掛かりな施設ではあるけれど、明るい感じがするんです。明治という時代が、そういう時代だったのでしょね」

この言葉は明治神宮の全体像を巧みに表現してゐると思ひます。

明治神宮は内苑と外苑に大きく分れてゐて、内苑は御祭神の明治天皇、昭憲皇太后が鎮座する本殿や、鎮守の森があるエリアです。ここは厳肅な空間であると同時に、参拝者を自然で包んでくれる場所でもあります。外苑には明治神宮野球場、秩父宮ラグビー場、テニスコートなどのスポーツ施設があり、東京オリンピックのメイン会場だった国立競技場も、昭和三十一年までは明治神宮外苑競技場でした。なぜこんなに多くのスポーツ施設が、明治神宮の名の下に造られたのでせうか。その答へは「明治天皇が尚武剛健の氣風を好まれたから」と説明されてゐます。

外苑に長年勤めた男性は、ここを「国民の健康広場」と呼んでゐました。選手はもちろん、観客も大声で発散することで、国民が健康になる場だといふ意味ですね。外苑は鍛錬の場で



あり、また、神宮球場で大声で応援してゐる人も、明治天皇の御心になつてゐるわけです（笑）。大変おほらかで、素晴らしいことだと思ひます。

外苑には聖徳せいとく記念絵画館もあり、八十枚の大きな絵が展示されてゐます。一枚目は「御降誕」、八十枚目は「大葬」で、明治天皇の御生涯を追つてゐますが、それだけではありません。西郷隆盛と勝海舟が向き合つた「江戸開城談判」や「憲法発布式」のやうに、誰もが教科書で見たことがある絵が、この絵画館のために描かれました。文化庁の芸術文化調査官は、私たちが明治に対して抱いてゐるイメージは、聖徳記念絵画館の絵画が基になつてゐると指摘してゐます。

雅英さんの「明治の遺跡」といふ言葉は、こんな風に読み解けるのではないかと思ひます。



## 民意の「森」

次に、日本文学研究者、ドナルド・キーンの『明治天皇』下巻から引用します。

「東京府民の多くは天皇が重体に陥ったことを知り、東京近郊の清浄の地を選んで陵域とすることを当局に建議哀願した。しかし、東京府民の嘆願は聞き届けられなかった。(中略)東京に明治神宮が造営されたのは、恐らく傷ついた東京府民の気持を慰撫することを意図したものであった」

明治天皇の崩御は明治四十五年七月三十日の午前一時二十分に発表されました。その当日に、渋沢栄一の事務所日本橋区議会の議長が訪れ、「ご陵墓をぜひ関東におとどめ申したい。これは日本橋全区民の希望である」と陳情してゐます。渋沢の娘婿で東京市長だった阪谷芳郎も陳情を受けてゐます。渋沢たちはすぐに動き出すのですが、八月二日には明治天皇が京都の桃山に陵墓を希望されてゐたことが明らかになります。そこでいったん頓挫して、代りに出てきたのが、明治天皇を祭る神宮を造営しようといふ案でした。

ここで強調したいのは、明治神宮造営の発端が、東京の人々の陳情だったといふことです。天皇陛下をお祭りする神社ですから、本来なら最初から国が全て進めてもをかしくない。でも実際には民意が発端でした。その民意の強さはどこから来たのか。

想像できる一つの要因は、「京都に明治天皇が行かれてしまふ」という東京市民の喪失感です。これは都内に陵墓がある大正天皇、昭和天皇の崩御の際にはなかったものです。また、明治天皇の崩御は非常に急な出来事でした。重体が発表されたのは崩御のわづか十日前で、それまでご病気であることも国民は知らなかった。七月十日には、東京帝国大学の卒業式に行幸されてゐたのです。崩御の衝撃は、重体から崩御まで四ヶ月の時間があつた昭和天皇の際よりも、ずっと大きかつたのではないでせうか。

この陵墓から神宮案に至る一連の動きは、後に明らかになつたのではなく、逐一新聞で報じられてゐました。これは御嶽山御嶽神明社（岩手県一関市）の佐藤一伯かずのり宮司が調べたものですが、大正元年八月の一ヶ月間に新聞に載つた明治神宮関連の記事は、東京朝日新聞で五十八本、国民新聞で五十六本を数へます。今よりずっと薄い新聞に、二本以上の明治神宮の記事が載る日があつたことになります。読者投稿も活発で、東京朝日新聞の投書欄には八月から九月上旬までに二十九本の明治神宮絡みの投書があり、造営に賛成が十五本、反対が

十四本と賛否両論が交されてゐました。反対と言つても「宗教施設ではない方がいい」として図書館や美術館などを記念施設として推す意見で、明治天皇を記念すること自体への反対ではありませんでした。

そして崩御から三週間後の八月二十日、阪谷たちの手で「明治神宮建設二閱スル覚書」がまとめられます。これは内苑、外苑構想をはじめとして現在の明治神宮の姿をほぼそのまま言い当てる<sup>あて</sup>ます。スケールの大きさなどに目を見張る内容ですが、これは阪谷たち要人が勝手に考へたものではなく、この間に新聞などに載つた意見を反映してゐました。「明治の遺跡」は、国民の考へを取り入れながら実現したものだつたのです。

### 英知の「森」

かうして関心が高まつたことで、必然的に「東京ではなく、自分たちの所に明治神宮を造つてほしい」といふ声が出始めます。

一番多かつたのが富士山で、霊峰富士こそ明治神宮の場所にふさはしい。いや埼玉県飯能市なら計画中の武蔵野鉄道で一時間半で行けるし、行幸の由緒もある。いや神奈川の箱根離

宮だ、茨城の筑波山だと、全部で十三候補地、三十九件の請願が国に出されます。

ここで困る人が出てくるんですね。最初に陳情を受けた渋沢栄一です。

「実は自分たちが奉賛会を作って資金を集め始めたのは全く東京に作るからと云ふ趣意であつたんだから、今更それを変へられては自分たちの立場がなくなるから、それに君らの専門の技術を応用されたならば金は幾らでも作るから人工で天然に負けない大風景を、大森林を作り出すことが出来ると思ふから。今度だけは東京に賛成してもらひたい」

これは渋沢が林学者の本多静六を説得した言葉で、本多が鎮座二十年記念の座談会で明らかにしてゐます。渋沢が頭を下げた理由は、明治神宮の森の造営責任者を務める本多が、東京での造営に難色を示してゐたからです。なぜでせうか。続けて、本多の姻戚のお茶の水女子大名譽教授、遠山益すまむさんの話です。

「代々木は乾燥地で荒地でもあり、煙害もあつた。神社にふさわしい莊嚴な森は針葉樹林とされていたが、伊勢神宮や日光とは違い、杉の生育に必要な川が代々木にはなかつた。

それでも造営地に決まった。本多静六は並々ならぬ決意であの森を造った」

困難な地に、明治天皇をお祭りする大事な鎮守の森を造らなければならない。杉林をあきらめざるを得なかった本多たちが代りに理想としたのは、仁徳天皇陵の森でした。五世紀に造営された仁徳天皇陵には、人の手が加はってゐない原生林のやうな森があります。人の手が加はってゐないといふことは、森の維持費を極めて低く抑へられるといふことでもあります。本多はドイツで「天然更新」といふ人の手を加へない森造りを学んでをり、ともに携はつた造園学・林学者の本郷高徳たかのり、上原敬二らとともに、それを明治神宮で実現しようと決意するわけです。

本郷がまとめた「明治神宮御境内林苑計画」は、百五十年を見通した森の変移を描いてゐます。当初は元から生えてゐたり献木されたりした針葉樹のマツを使って見栄えを確保し、数十年後にはマツ以外の針葉樹であるヒノキ、サワラなどが台頭し、やがて足元から育つてきたシイ、カシ、クスなどの常緑広葉樹が主役になっていく。百年後の今、森は予想通りに遷移し、計画では百五十年後とされた最終段階に至つてゐるさうです。早まった理由は、地球温暖化が一因ではと考へられてゐます。大正時代に、これほどの気候変動は想像できな

ったのでせう。

### 全国に広がる由来

実際に森や社殿を造るには、大量の木々も労力も必要です。次の言葉に行きませう。父親が明治神宮造営奉仕に参加した静岡県御殿場市の小宮山哲男さん、八十七歳です。

「この木も、あの木も、献木が本当に雄大な森になった。参道を歩くと、ここでおやじらがトロッコに乗って、汗をかいていたんだなあと思いました」

明治神宮は全国から寄せられた約十万本の献木と、延べ十一万人に上る青年団の造営奉仕によって誕生しました。背景には、第一次世界大戦直後の好景気で物価が上昇し、木々の購入費用が予算に計上されず、人件費も値上がりしてゐたといふ国の台所事情がありました。献木と青年団の奉仕は苦肉の策でもありましたが、このことが明治神宮を東京だけでなく、全国に由来がある神宮へと高めることになります。あの建物は自分たちの父祖が造った、あ

の場所の木々はここから献木されたといふ物語が、全国に生れてゐるのです。

献木について、上原の愛弟子でもある福井県立大学長の進士いそや五十八さん（元東京農業大学長）は、かう話してゐます。

「献木された木に付いていた土の中には、いろんな種たねが入っている。種だけじゃなくて昆虫やバクテリアもいる。それが全国から集まった。献木は明治天皇への崇敬の念の表現だった一方で、今の明治神宮の多様な生態系を作ったのです」

百年を経て豊かに成長した森には、関はった人々から生物に至るまで、実に多様な物語が織り込まれてゐます。

### 空襲の夜

大正九年の鎮座に至るまでの話をしてきましたが、これから参拝する施設の大半は、昭和三十三年に再建されたものです。主要施設は度重なる空襲で焼失してをり、最大の被害は昭

和二十年四月十四日未明の空襲でした。

午前零時四十分ごろ、境内上空にB29が侵入します。投下された焼夷弾は一千三百三十発。あちこちで火の手が上り、神職などの職員が必死で消火して一時は鎮火に向ひますが、水源が少ないことが災ひして再び炎上してしまひます。何より大事だったのが、明治天皇と昭憲皇太后の御霊代（御神体）をいかにしてお守りするかといふことでした。

御霊代は前年十一月、本殿の近くに設けられた宝庫に遷されておりました。防空壕のやうなものです、それでも心配な神職の様子を見に行きます。「明治神宮戦災日誌」を基にした『明治神宮五十年誌』からの引用です。

「福島部長（筆者注・福島信義主典、後の宮司）は消防士の一人を伴ひ現場に於て、宝庫の耐火程度を檢分し、絶対安全なりとの証言を得たが、万一の場合を考慮し、且、猛火の裡に奉安し置くことは頗る恐懼と不安に堪へないので、宮司に進言し、宮司は茲に奉遷の議を決し、神職を集め、命令一下、午前一時二十分、奉遷を奉仕した。鷹司宮司、高島禰宜、高沢、福島、飯尾、前田各主典、小町、武田両出仕は覆面、手套、木綿襷を掛け、御廊の座にて修祓、次いで、宮司は外陣にて一拜、御錠を解き内陣の御扉を開き御霊代を外



院唐櫃いんからびつに奉安し、次いで宮司奉戴、高沢・飯尾主典、福島・前田主典夫々奉昇し、宝庫を出御、小町出仕の御前導にて北神門より北玉垣鳥居を出でさせられ、北玉垣西北隅より苑内の小径を通御、紅葉小路西側の松林より芝生を横切り、宝物殿正門たのうらより中倉ちゆうそう正面階段を昇らせられ、中倉に著御、宮司以下大前に祇候奉護す。時に午前一時三十九分」

御霊代を遷すには、奉遷の儀といふ神道の儀式を執り行はなければなりません。炎上する境内で、八人の神職たちはそれを行ひ、さらに約六百トル離れた宝物殿への遷座をわづか十九分でやり遂げたと記録は伝へてゐます。

本当にそんなことができたのでせうか。当時の映像はもちろん残つてゐませんが、目撃証言があります。この日の夜に社務所の当直だった林苑技手の本多伴ひんどし（後の日本造園学会会長）の日誌です。

「再ビ本殿ニトツテ返セバ、拜殿崩レ落チテ便殿東廻廊火勢愈々盛ナリ。（中略）神饌所付近ニカカレバ何人カ噴キ出ス黒煙ノ冥くらキガ中ニ木綿襷ノミホノ白ク浮キ出シテ、必死ニ物ヲ打碎クガ如キ音洩レ聞ユ」

拜殿が焼け落ちる惨状の中で、火災の黒煙の中に木綿襷が白く浮き出すのを本多は見た。この木綿襷が、奉遷の儀に臨む神職の装束の可能性が高いのは間違ひないでせう。

夜が明けると、本殿は黒い柱だけが焼け残ってゐました。しかし、この日の昼間、鈴木貫太郎首相や内務大臣、警視総監といった要人たちが明治神宮に正式参拝してゐます。場所は御霊代が遷座した宝物殿です。御霊代を守ったことで、社殿は失はれても、明治神宮は失はれてゐなかつたんですね。

### 言葉の「森」

明治神宮の社頭では、百円でおみくじが入ります。このおみくじは「大御心」と名付けられ、明治天皇の御製か、昭憲皇太后の御歌が印刷されてゐます。

「実際、祭られている神様の言葉が残っている神社はなかなかないんです。そういう中で、明治天皇は十万首近く、昭憲皇太后は三万首近くメッセージが残されています」（明治神宮

確かに、御祭神の言葉がこんなに残ってゐる神社はありません。明治以降に亡くなった軍人を祭つてゐる靖国神社は別ですが、たとへば伊勢神宮に祭られてゐる天照大神は、たくさんの言葉を残されてはいらっしゃいませんからね。

御製、御歌のおみくじは最初からあったものではなく、昭和二十二年の正月から参拝者に授与されるやうになりました。きっかけになつたのは、敗戦後にGHQ(連合国軍総司令部)が出した「神道指令」です。神社は国家とのつながりを断ち切られ、宗教法人として自立を迫られました。氏子のゐない明治神宮にとつても重大な問題です。昭和二十一年二月に開かれた「明治神宮の将来に関する懇談会」に、こんな発言があります。

「当神社従来の授与品としては、しんぷしゆさつ神符守札のほか外戦災前迄は絵葉書、版画等を授与して居たが、戦災に依り不可能となつた。印刷し得る時期とならば、絵葉書特に御製御歌の印刷物も授与したい考へである。従来御製御歌の印刷物は、御祭典に於ける参列員等に授与して来たが、将来は日常社頭に於いて授与する考へである」(田中喜芳権宮司)

出席した渋谷区長は「すぐにやるべきだ」と賛同し、翌年一月に実現します。御製と御歌をおみくじとするアイデアを出したのは、当時の明治神宮総代で東京帝国大教授を務めた神道学者、宮地直一でした。宮地が「倫理的、教育的な歌」として選んだ御製、御歌十五首づつが「おほみごゝろ」といふ名のおみくじとなり、宮地による解説文も付けられました。彼が選んだ三十首は今も引き継がれてゐます。解説文は昭和四十一年により分りやすく改められ、四十三年には明治維新百年を記念して英語版も作られました。鎮座百年の令和二年の正月からは、日本語版と英語版を一つにした新しい大御心が提供されてゐます。

「おほみごゝろ」ができた昭和二十二年といへば、GHQが主導した日本人の価値観を戦前から大転換させる政策の渦中です。その状況下で、明治神宮は御製と御歌といふ確かな言葉によって国民との紐帯を結び直さうとしてゐました。現在も大御心だけでなく、参拝前に手を清める手水舎に月替りで御製と御歌が掲示され、参道の看板にも、武道場の至誠館の道場にも掲げられてゐます。ただ、これらの歌は約十万首の御製、約三万首の御歌の世界の入り口に過ぎません。言葉の「森」も、明治神宮には内在してゐるのです。

## 生きてゐる「遺跡」

最後に、御製の中から、明治神宮がある東京・代々木と明治天皇、昭憲皇太后との由緒を示す一首を紹介しませう。

里（明治三十九年）

うつせみの代々木の里はしづかにて都のほかのこことこそすれ

これは明治神宮御苑の前身の代々木御苑を詠まれた御製です。明治天皇は明治十九年に一度だけここをお訪ねになってゐます。歌は二十年後のものですが、大変気に入ったやうで、昭憲皇太后のために隔雲亭といふ休息所を三十三年に代々木御苑に造られ、三十六年には花菖蒲を植ゑさせました。昭憲皇太后はここに九回もお出ましになり、池では釣りも楽しまれたと伝はつてゐます。これが代々木御苑が造営地に選ばれた理由の一つです。今も毎年六月頃には、美しい花菖蒲が御苑を彩つてゐます。

東京大名誉教授で解剖学者の養老孟司さんは、産経新聞での連載の最後に、こんな問題提

起をしてくれました。

「(明治神宮造営は)陳情など一般市民もずいぶん力を尽くしたわけですね。いい意味での共同意識が残っていた。今は国全体がばらばらで、オリンピッククにしても、やった方がいいのか、やらない方がいいのか、よく分からない。明治にあったような国家としての全体像が描けなくなつたのだと思います。(中略)今、自分たちが明治神宮のようなものを残せるかを考えた方がいい。古い物は遺跡などたくさん世界中にあります、それが生きていくところは少ない。明治神宮を生かすも殺すも、現代の人たちの考え次第だと思います」

百年前、御苑以外は大半が荒地で川もなかったこの場所に、日本人は叡智と労力を結集して鎮守の森を造り、厳かな神宮を建立し、戦時の空襲の中でも御祭神を守り抜いてきました。そして百年後の今、私たちは外苑のスポーツ施設などに親しみ、内苑では都心とは思へないやうな深い森に癒やされ、新型コロナウイルス禍で悩みや困難がある中で、明治天皇と昭憲皇太后に手を合せて明治神宮を訪れてゐます。

今、自分たちが明治神宮のやうなものを残せるか。これは現代の日本人にとって大変重い問ひかけです。ただ、養老先生は「生きてゐる遺跡は少ない」と仰いました。が、明治神宮は生きてゐます。これからも明治の遺跡を守っていくことが、本当に大切なことだと思つてゐます。

# 一年の歩み

—第六十六回全国学生青年合宿教室と  
各地区の定例的な研修活動—





## 第六十六回全国学生青年合宿教室のあらまし

令和二年の年初からの武漢発ウイルス感染症の広がりによって、度々外出の自粛が叫ばれ、さらには数次に亘って緊急事態宣言が発せられて、「外出の自粛」の他に「三密（密閉・密集・密接）の回避」が重ねて呼び掛けられた。そのために宿泊による研修を基本として続けられて来た「合宿教室」の運営は様々な制約を受けてゐたが、令和三年に入っても感染症の波は収まらず、前年と同様に活動は多くの制限を受けた。さうした中であつて、感染症拡大への予防措置を伴ひながら、第六十六回全国学生青年合宿教室が《関西会場》および《主会場》の二会場に分れて実施された。

### 《関西会場》のあらまし

令和三年七月三日（土）、四日（日）

#### 企画した経緯

関西地区では毎月一回、本会六十年記念出版の『語り継ごう日本の思想』（明成社刊）を輪読してゐるが、令和二年の春以降、武漢発ウイルスによる感染症予防のためにオンラインでの開催となつてゐた。毎回十数名の参加があるが、その半数はこの時期に加はつた方々であり、名前と顔は一致するものの、お互ひの理解は必ずしも十分とはいへない状況であつた。

このことは当然、輪読する際の感想や意見のやり取りにも影響して、隔靴搔痒の感は否めないものがあつた。そこで、従前からの合宿教室のやうに、寝食を共にすることで相互の理解を深めて輪読の際のやり取りをより実りあるものにしたたい、といふのが輪読会を運営する我々の願ひであつた。

しかしながら、感染症拡大の状況から「三密」になりがちな宿泊研修は無理であるとの判断から、令和三年七月三日（土）と四日（日）の両日、二日連続の日帰りでの研修といふことに落ち着いた。会場は茨木市立男女共生センター・ローズWAMであつた。参加者は十一名で、さらにオンラインで三名の方が加はつた。

## 一日目

開会式での本会理事の布瀬雅義氏（メルマガ・国際派日本人養成講座編集長）による「対話を通じて『他と共なる学問』を」との挨拶から《関西会場》の研修は始まつた。

まづ細谷真人氏（令和ライフスタイル研究所）の主導で所謂「偏愛マップ」の方法で自己紹介が行はれた。手順は左のやうである。

画用紙一枚に、各自が自分の「偏愛する物事」（自分が心底から大事に思つてゐるもの）を自由記入する。②二人一組となり、相手の画用紙（マップ）を一分間ちつと眺める。③お互

ひに相手のマップの中で聞きたいことを質問して、答へる。④他の人ともペアを作って、②③を繰り返す。通常の自己紹介では「自分が言ひたいこと」を述べるが、この方法では「他の人が自分について知りたいこと」を尋ねてくれる。それまで知らなかった参加者の意外な一面や「もつと聞きたい」ことが沢山出てきて、大いに盛り上って打ち解けた雰囲気になった。

続いて「輪読」をテーマとした元大阪府立高校教諭の絹田洋一氏による「輪読で小林秀雄さんに学んだこと」と題する講話が行はれた。小林秀雄の『美を求めるところ』および高見澤潤子の『兄小林秀雄との対話』の一節を引きながら、「輪読する文章に僅か数時間触れた程度で、本当にその文章が、それを書いた人物が分ったといへるであらうか。表面的な意味を自分流に解釈して分った気になってゐるだけではないのか。安易に言葉にできない、沈黙に耐へる体験も必要である」と述べて、オンライン輪読会の内容に一石が投じられた。

その後の二つの班に分れて行はれた班別研修では、文章に真摯に取り組まうといふ姿勢を一同が意識して、班員の言葉にじっと耳を傾け、己れの内面とも向き合ふ時間になった。

## 二日目

参加者は事前に短歌を詠んで来て、提出することになってゐた。その歌に基づいて、東洋紡(株)勤務の庭本秀一郎氏によって「創作短歌全体批評」が行はれた。歌に詠まれたそれ

ぞれの情景や詠者の気持ちを観しながら、それが正しく表現されてゐるかどうかといふ点から添削がなされて、自分の気持ちを正確に言葉にするといふ短歌創作の際の留意点が指摘された。

続いて二班に分れて班別短歌相互批評を行なった。互ひそれぞれの歌に込められた作者の想ひ、その情景などを問ひ尋ね、詠者は身振り手振りを交へて説明した。班員からは作者の気持ちを推し測つて、「本当はかう感じたのではないのか」「この言葉の方が正確ではないか」などとの感想が出されて推敲が重ねられた。自分の気持ちを過不足なく表す表現に行き着いた時の詠者の晴れ晴れとした表情は印象的であつた。

### 閉会式

日帰り二日の短い研修ではあつたが、言葉と自



分の心に向き合った濃密な時間であった。各自の感想を語り合ひ感想文を執筆して閉会した。秋以降の関西地区での輪読会が楽しみである。

(税理士法人勤務 北村公一)

《主会場》のあらまし 令和三年八月二十八日(土)

令和三年の夏に予定されてゐた第六十六回全国学生青年合宿教室は、前年から広がってゐるウイルス感染症の先が見通せない状況下、「宿泊」での研修を諦めざるを得なかった。さうした中で、七月三日(土)、四日(日)の「日帰り研修」二日の日程で開催された《関西会場》に、続いて八月二十八日(土)に、東京都渋谷区のオリンピック記念青少年総合センターに於いて《主会場》での研修が営まれた。当初は八月二十八日(土)及び二十九日(日)の「日帰り二日間」の日程で計画されて、既に「勧誘のチラシ」(次頁掲載)も作成されてゐたが、感染症拡大の様相を考慮して急遽、「日帰り一日」に短縮されて開催され、学生社会人合せで五十四名が参加した。

さらにウイルス禍への対応として、今回初めて《主会場》での講義の様子は、インターネットで茨城、関西および九州六箇所のサテライト会場にも配信され、延べ三十二名が参加した。

開会式

第66回 全国学生青年合宿教室 (主会物)

～祖国・学問・人生を語る～ ※2日連続の日帰り研修

合宿教室のテーマ

1. 世界における日本のあり方を考える
2. わが国の歴史と文化をより深く理解する

主催 公益社団法人 国民文化研究会  
大学教育有志協議会

令和3年8月28日(土)・29日(日)

場所 国立オリンピック記念青少年総合センター (渋谷区代々木)

※「2日連続の日帰り研修」について

『全国学生青年合宿教室』は、昭和31年より毎年定かぎで開催され、これまでも数多くの参加者に多くの栄誉を与えてきました。「合宿教室」とあるように、本来参加者が理由も共にして思いのたけを語りあうものですが、今回はコロナの影響により、心もえす宿泊は断念し、「2日連続の日帰り研修」として、聴講の輪、輪読などの視覚的相互研修を行う予定です。



■講師プロフィール  
評論家、昭和37年、東京都生まれ。  
九州大学卒業後、月刊誌編集、団体職員、国会議員政策スタッフを務めたのち、安全保障、インテリジェンス、近代史などに幅広い知見を有する。論壇誌へ寄稿多数。令和元年第20回言論朝賞受賞。著書に、『インテリジェンスと保守自由主義 新型コロナに見る日本の動向』(青林舎)、『コミンテルンの謀略と日本の敗戦』(日本と経典)『戦後革命』の危機』(戦後戦争と日本・台湾「橋」)『工作』(以上PHP文庫)、『日本は誰と戦ったのか』(NHKベストセラーズ)、第1回アハ日本再興大賞受賞、『日本外務省はソ連の対米工作を知っていた』(青林舎)、『読んではいけない! ? 国家論』(産経新聞社)との共著、扶桑社)、『東洋に翻弄されたアジア史』(福島書院、宮崎洋子との共著、扶桑社)など多数。

評論家 / 江崎 道朗 先生  
演題 / DIME—外交、インテリジェンス、軍事、経済— から国際情勢をいかに読み解くか

■過去の主要講師 (同一学年(代)の重複あり)

竹山 達雄 (昭和32年2期)	小堀 勉一郎 (昭和58年10期)
木内 成雄 (昭和35年20期)	徳岡 孝夫 (平成6年2期)
小林 秀雄 (昭和36年5期)	長谷川 三千子 (平成7年6期)
福田 恒彦 (昭和37年4期)	小川 三夫 (平成7年2期)
原 亨 (昭和40年2期)	伊藤 賢夫 (平成8年2期)
杉本 龍 (昭和46年9期)	竹本 忠雄 (平成8年2期)
夏 紀郎 (昭和57年2期)	丹波 千景 (平成11年2期)
藤原 忠 (昭和58年3期)	中西 隆雄 (平成14年4期)

合宿教室では、学問、祖国、人生の一体的把握を目指してきた。例へば、萬葉集に『多摩川の娘が愛しい』といふこの歌を耳にして、今の若者の心が動くといふことは、千三百年前の

冒頭の国歌斉唱では、感染症の予防から講義室に流された君が代の曲律に一同耳傾けた。次いで戦時平時を問はず祖国日本のために尊い生命を捧げられた全ての祖先のみ霊に一分間の黙禱が捧げられた。

小柳志乃夫理事長は開会の挨拶の中で「今年で六十六回を迎へたこの

祖先の気持ちが現代の我々に繋がってゐるといふことだ。我が国では神々から歴代の天皇まで歌を詠まれ、国民と心を通はせてこられた。この世界的に稀有な国柄は今に続いてゐる。今日では過去との繋がりを断たうとする動きが目立つが、祖先の生き方を偲ぶことは学問の出発点である。残念ながら日帰りの日程のため短歌創作の時間はないが、ご講義を通して我が国の歴史と現代の課題をしっかりと学んでほしい」と述べた。

### 講義

続いて、直ちに講義に入った。

最初は筑波大学非常勤講師の伊勢雅臣先生による「国史を貫く皇室の祈り―『大御宝』の理想―」であった

冒頭で先生は、閉幕したばかりの東京オリンピックでの日本選手団の活躍ぶりを取り上げて、その根柢には、「国の代表として頑張る」「応援してくれる人のために戦ふ」といふ選手の発言に窺はれる利他の気構へがあるのではないか、それは太古から共同体を支へたものであって、その蘇りの現れではなからうかと指摘された。そして縄文時代の三内丸山遺跡（青森県）の巨大な建造物跡からは、大勢で協力しながら暮してゐたであらう生活の様相が浮んで来ると語られた。狩猟採集の時代から、「自然と祖霊とに守られてゐる」との意識の下に人々

は生きてゐたであらうことが近年の遺跡の発掘からも推測されてゐるとも説かれた。

そして、『日本書紀』が伝へる初代・神武天皇の建国宣言では、「元々」(「人民」の意)といふ語を「おほみたから」(大御宝)と訓よんでゐる。ここに「人々を宝のやうに大事にして、国民が安心して暮らせる国を作らう」といふ建国の理想が語られてゐるとして、仁徳天皇以降の治水や灌漑工事や、「氏族国家から公民国家へ」の国作りを目指した聖徳太子の時代の冠位十二階および憲法十七条などに触れながら、皆が智慧を出し合つて、より良い国に行かうとする「皇室の祈り」が貫かれてゐることを指摘された。さらに、十九世紀になつて西欧列強が来航すると、分権的な幕藩体制から中央集権の近代的な国民国家に革あらためるべく明治維新が行はれたが、その理念である「五箇条の御誓文」には、一人ひとりが自由に活動して、しかも互ひに心を合はせて国家を担つてゆくといふ思想が示されてゐて、それは十七条憲法の精神にも通じるものであつて、「二人の国民も取り残されることない国を目指すとの大御宝の理想を掲げたものである」と語られた。

### 班別研修

講義拝聴後、四つの班に分けられてゐた参加者は、講義室内で班ごとに集まつて、自己紹介(顔合せ)を行った。昼食・休憩後、班別研修を行った。伊勢講師が提示した「国史に一



貫する精神的伝統」は、ともすれば現在のわが国では看過されがちの事柄であった。提起された歴史を貫く理想について、感じたことや思ふところを披瀝し合った。

### 講義

引き続き、二つ目の講義である評論家の江崎道朗先生による「DIMEに基づいて国際情勢をいかに読み解くか—diplomacy(外交)、intelligence(諜報)、military(軍事)、economy(経済)—」が行われた。

かつて九州大学在学時の先生が、地元にお住ひの小柳陽太郎、山田輝彦の両先生のお宅まで伺って多くのことを学んだことや、小柳先生からは「日本の政治は戦後だけでなく戦前に於いて既に大きな問題がはらまれてゐたのだから、昭和史については戦前戦中期を含めて、しっかり理解しなさい」といふ宿



題をいただいたことを回顧するところから講義は始まった。小柳先生ご自身も、先輩方がやってきたことを学び、その後を継いできたとお述べになつてゐたと紹介されて、「先人が追ひ求めてきたものを後進の者が求める」といふ「志のバトン」を受け継ぐことで学問は始まると語られた。

そして本題に入り、厳しい国際環境の裡にあつて、どのやうな心構へで諸課題に取り組んだら良いのかについて説かれた。独立国家としての学問的基礎とは如何なるものなのか、GHQの言論統制の影響が濃厚に残つてゐる現状の問題点は何なのかに触れつつ、国家間の戦ひは外交・インテリジェンス・軍事・経済の四つを戦略的総合的に組み合はせた総力戦であるから、日本が賢く強くなるためには、「独立国家としての学問」に基づく政治体制の構築が必要であると強調された。さらに、敗戦後のGHQの占領政策によつて「独立国家としての学問」を奪はれてしまつて、独立国家としての主体性に裏付けられた政治を確立しようとする努力をずっと怠つてきた。しかし、第二次安倍政権で、やうやく「自由で開かれたインド太平洋構想」の提言や、国家安全保障会議（NSC）の創設、国家安全保障戦略の策定などが行はれた。今後はさらに、「独立国家としての学問」に基づいて、アジア太平洋に責任を持つといふ日本の国家戦略に拠る政治、行政の仕組みを作り直すことが重要である」と語られた。

## 班別研修

学生時代の師との邂逅とそれによる勉学を回顧しつつ語る江崎講師によって、現実の国家的課題が提起された。「独立国家としての学問」といふ視点について感じたこと思ったことなどが語り合はれた。

## 感想文執筆

二つの講義とそれを受けての班別研修での遣り取りで気付かされたことや考へさせられたこと、今後の抱負などを各自認めた。

## 閉会式

池松伸典副理事長（運営委員長）は閉会の挨拶の中で「ウイルス禍の中で、日帰り一日の研修となったが、ご参加いただいた感謝してゐる。ここでの出会いが大きな学びの第一歩となることを願つてゐる」と述べ、さらに首都圏での国文研の活動（短歌の会、読書会など）を具体的に紹介して、今後の交流を呼び掛けた。

## 《主会場》 追補企画のあらまし

令和三年十月二十三日（土）

〔明治神宮参拝と短歌創作体験〕

ウイルス禍を考慮して、八月二十八日（土）、二十九日（日）の「日帰り二日間」の予定だった《主会場》での研修は、さらに短縮されて、八月二十八日のみの開催（午前十時～午後六時）となつてゐた。そのため当初予定されてゐた「合宿教室」での研修の大きな柱である、短歌創作と相互批評、および産経新聞社会部編集委員の鶴野光博氏による講話が未実施になつてゐたことから企画され、同じくオリムピック記念青少年総合センターに於いて実施された。参加者は三十一名であつた。

「短歌創作を体験してみよう！」といふ企画の趣旨を踏まへて、先づ最初に一般社団法人日本港運協会理事の久米秀俊氏による「短歌創作の手引き」と題する解説が行はれた。「短歌は五七五七七の三十一文字の中に、作者の思想や体験、心情を表すもので、感動を受けたときに、それを言葉に表現して、その感動を自分自身で確認して、味はふこと（追体験すること）である。歌をつくるには、先づは他者の歌をよく読んで歌といふものを知つて、それにならつて詠んでみることだ」と語つて、いくつかの歌を例示しつつ、感じたままを言葉を飾らずに詠むことが大切なことで、伸び伸びと取り組んで欲しいと説かれた。

続いて、産経新聞社会部編集委員の鶴野光博氏によつて講話「明治神宮の深い『森』」が行はれた。

昨年（令和二年）十一月に、鎮座百年を迎へた明治神宮は鬱蒼とした深い森の中にあるが、産経新聞では鎮座百年の明治神宮に関して、様々な視点から説き明かした「一〇〇年の森 明治神宮物語」と題する連載記事を掲載してゐる。その連載を担当された鶴野編集委員によつて、造営地が代々木に決まるまでの経緯から、「明治神宮の森」が林学者の本多静六の、百年先に大森林となるといふ壮大な計画によるものであること、昭和二十年四月の空襲の災禍を経て昭和三十三年に再建されたことなどが紹介された。

さらに明治神宮で配布される御製・御歌について、「明治の天皇皇后両陛下のみ教へを直接国民が仰ぐ手立となつてゐるが、祀られてゐる神様のお言葉が残されてゐる神社はなかなかないんです」との神職さんのお話や、解剖学者で東大名誉教授の養老孟司氏の「古い遺跡は世界中にあります、それが生きてゐるところは少ない。明治神宮を生かすかどうかは現代の人たちの考へによる」との言葉に触れながら、「明治神宮は生きてゐる」と語られた。

### 明治神宮正式参拝

講話をお聞きした参加者は揃つて北門（参宮橋口）から神域へと向つた。前夜からの雨も上がり木漏れ日を通して青空が清々しく仰ぎ見られた。先づ正式参拝で一同整列して大太鼓の音をまぢかに聞いて拝礼するといふ稀な体験をした。ご案内いただいた神職の方から、講

話でもお聞きした空襲の折の被害の様子とその後の  
再建のお話を伺った。

### 短歌創作と創作短歌相互批評

参拝後、境内を散策しつつ短歌創作に勤しんだ  
一同は再びオリムピック記念青少年総合センターに  
戻って、昼食を摂り短歌を提出した。

相互批評は三班（一班十名ほど）に分れて行はれた。  
限られた日程の中で二時間が割かれて、作者の気持  
ちに添ったより良い表現を目指して、相互に感想を  
出し合ひながら進められた。ウイルス禍のため月例  
の「短歌の会」がオンラインによる開催だったこと  
もあって、久しぶりに一人一人の表情を見て、直に  
声を聞きながらの相互批評に改めて新鮮なものを感じ  
た参加者もゐたやうだった。作者が何に感じて、  
どのやうな心の動きを表現しようとしてゐるのかに



ついで、正確な表現を求めて行くのは易しいことでないが楽しいことでもあって、もっと時間が欲しいところであった。

互ひに率直に感想を述べながら、作者の表現しようとしたところに近づいて行く過程は、心の交流といふ学びにとつて何にも代へ難い道筋であった。  
(元東急建設(株) 奥富修一)

尚、東京地区で例年五月か六月かに開催されてゐた国民文化講座は、ウイルス感染症の蔓延を考慮して令和二年は十一月に変更して実施されたが、令和三年の第二十四期(第三十三回)もウイルス感染症への対策をとりつつ、十一月二十一日(日)の午後、千代田区立日比谷図書文化館大ホールで開かれた。講師は東海旅客鉄道株式会社名誉会長の葛西敬之先生で、演題は「二十一世紀の体制への世界的転換点―我々は何をなすべきか」であった。一時はオンラインでの開催も検討されたが、直接にお話しをしたいとの先生の有難いご意向を承けて開催され、七十七名が聴講した(ご講演の要旨は、本会の月刊紙『国民同胞』令和四年二月号掲載の日本港運協会理事の久米秀俊氏による聴講報告記に記されてゐる)。

○

令和三年の「第六十六回全国学生青年合宿教室」は、前年と同様にウイルス感染症の影響

を受けざるを得なかった。さうした中で「密接」「密着」「密閉」を避けつつ、少しでも従前に近い成果を挙げるべく「日帰り」ながら実施されたのが、茨木市での《関西会場》（日帰り二日）と東京での《主会場》（日帰り一日、および「追補企画」日帰り一日）とであった。一部オンラインでの中継を加へての計四日間の研修であった。

参加者は《関西会場》と《主会場》とで合せて九十六名で、さらに両会場の三十五名のオンライン参加者を加へると計百三十一名であった。ウイルス禍の影響があつたとは言ひながら不本意の結果であつた。国民文化講座の聴講者を含めると全体で二百八名の参加であつた。

### 各地区の定例的な研修活動

—令和三年八月までの一年—

令和二年の年初から国内に広まったウイルス感染症の波は令和三年に入つても収束の見通しが立たなかつた。そのために、研修活動は様々な制約を受けて、各地の定例的な勉強会の多くはオンライン形式に切り替へられた。中には対面とオンラインとを併せて開催したところもあった。感染症への対策を採りつつ対面形式で研修を続けたところもあった。しかしながら、ウイルス禍を考慮して、やむなく「一時休止」になつたところも一部にはあつた。



【関東地区】

『短歌通信』の発行

日時 原則月一回発行（令和三年八月末現在、第百七十号）

内容 北海道・富山・大阪・山口・長崎・福岡・熊本・東京などでの短歌会での詠

草や各地から直接寄せられた短歌を編集してのネット発信および郵送

世話役 澤部壽孫

小林秀雄著『本居宣長』読書会

日時 月一回（水曜日または木曜日）十八時半～二十時

場所 国文研東京事務所、およびオンライン

内容 國武忠彦参与の指導による『本居宣長』の講読

世話役 北濱 道

日本の歴史を学ぶ連続講座（第三期、テーマ「日本人のまじめさ」）

日時 四回開催

場所 オンライン

内容 『語り継ごう日本の思想』所載の「中江藤樹」「荻生徂徠」「契沖」「本居宣長」

の項の輪読

世話役 北濱 道

東京短歌の会

日時 毎月第四土曜日十時から十二時

場所 国文研東京事務所、およびオンライン

内容 各自創作の短歌についての相互批評

世話役 奥富修一、佐野宣志

四土会

日時 毎月第四土曜日十四時から十七時

場所 国文研東京事務所

内容 黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読

世話役 内海勝彦

三井甲之研究会

日時 毎月一回、九時三十分から十一時三十分

場所 オンライン

内容 三井甲之著『明治天皇御集研究』の輪読

世話役 池松伸典

駒場読書会

日時 毎月一回（学生対象）

場所 東京大学、およびオンライン

内容 新渡戸稲造著『武士道』の輪読

世話役 小柳志乃夫

松陰会

日時 毎月一回、十九時から二時間程度

場所 国文研東京事務所、およびオンライン

内容 吉田松陰遺稿の輪読

世話役 久米秀俊

葦牙の会

日時 毎月第三土曜日十四時から十六時

場所 国文研東京事務所、およびオンライン

内容 小林秀雄著『本居宣長』の輪読

世話役 柴田悌輔、飯島隆史

日本の国柄と皇室に関する研究会

日時 隔月一回土曜日十時半～十三時

場所 国文研東京事務所

内容 御製・詔勅の輪読及び日本の国柄と皇室に関する研究発表

主宰 大岡 弘

北鎌倉輪読会

日時 ①毎月第四日曜日十三時～十五時半

②奇数月の第三日曜日十三時～十五時半

場所 鎌倉円覚寺の如意庵、臥龍庵

内容 ①佐藤健二先生による小林秀雄著『本居宣長』の講読

②小柳陽太郎他編著『名歌でたどる日本の心』の輪読

世話役 足立靖枝

つき  
調の会

日時 毎月一回、十九時～二十一時  
場所 さいたま市浦和区岸町公民館  
内容 本居宣長著『古事記伝』の輪読  
世話役 岸野克己、飯島隆史

【東北・北海道地区】

北国短歌の会

日時 毎月第二土曜日  
場所 オンライン  
内容 短歌創作、短歌通信『北前船通信』の発行発信  
世話役 大町憲朗、須田清文

【北陸地区】

かたかごの会

日時 毎月第一日曜日  
場所 高志の国文学館（富山市）

内容

①黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』、『朗読のための古訓古事記』の輪読、短歌の創作と相互批評。

②「かたかごの会」の活動を主軸に、短歌通信『高志のうた』の発行発信（令和三年八月現在、第六十二号）

世話役

岸本 弘

### 【関西地区】

#### 関西信和会

日時

毎月一回、十四時〜十七時

場所

吹田市又は神戸市の公共施設、およびオンライン

内容

短歌の創作と相互批評、長谷川三千子著『神やぶれたまはず』の輪読

世話役

北村公一

#### 学生輪読会

日時

毎月一回、参加学生の都合によって、適宜曜日などを決める

場所

オンライン

内容

國武忠彦編著『語り継ごう日本の思想』の輪読

世話役 絹田洋一

【中国地区】

中国短歌の会

日時 毎月一回

場所 オンライン

内容 短歌の創作および相互批評

世話役 内田巖彦

【福岡地区】

太子会

日時 毎月一回日曜日九時～十一時

場所 日章工業(株)会議室、またはオンライン

内容 黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』、『黒上正一郎先生のう

たと消息』の輪読

世話役 藤新成信

小柳陽太郎先生に学ぶ勉強会

日時 毎月第二火曜日十八時四十五分～二十時四十五分

場所 福岡市内の会議室（オンライン併設）での開催

内容 小柳陽太郎著『日本のいのちに至る道』、『随想十二ヶ月』の輪読

世話役 山口秀範

眞木和泉守研究会

日時 毎月一回不定期十三時～十六時

場所 水天宮社務所（久留米市）

内容 眞木和泉守直筆「文久日記」の読み合せ

代表 志賀建一郎

筑紫短歌の会

日時 毎月一回（中旬もしくは下旬の土曜日または日曜日）三時間

場所 オンライン

内容 創作短歌の相互批評

主宰 小野吉宣

しきしまの道の会



日時 毎月第三火曜日十五時三十分～十八時三十分  
場所 寺子屋モデル事務所、およびオンライン  
内容 創作短歌の相互批評  
代表 山口秀範

【佐賀地区】

鳥の郷古典素読会

日時 毎月一回火曜日十九時～二十一時  
場所 鳥栖北地区公民館  
内容 日本古典（『平家物語』など）の素読  
主宰 西山八郎

【長崎地区】

長崎短歌の会

日時 毎月第三水曜日十二時～十五時  
場所 さくら荘（長崎市）  
内容 創作短歌の相互批評

世話役 内田英賢、橋本公明

【熊本地区】

三土会

日時 毎月第三土曜日

場所 オンライン

内容 黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読

世話役 河崎由紀夫

熊本短歌の会

日時 月一回

場所 オンライン

内容 山田輝彦著『短歌のこころ』、各自詠草の短歌についての相互批評

世話役 今村武人

【鹿児島地区】

輪読と昭和史研究会

日時 毎月一回

場 所 鹿児島市勤労会館  
内 容 昭和史の研究、國武忠彦著『古典にふれる喜び』（国文研叢書）の輪読  
世話役 野間口俊行

合宿詠草抄



《関西会場》

令和三年七月三日（土）、四日（日）

（※順不同、「相互批評」で推敲されたものを含みます）

運転手を始むるにあたりて

枚方市 中村隆仁

安らげる車内と安全運転が乗らるる方の望みと思ふ

自らが健やかにあることこそが「おもてなし」なす基もとみと思ふ

バック時は降車目視を心がけ焦らず慌てず一間をおかむ

大津市 石部大史

ワクチンで体火照るも気にならじ禍まがに苦しむ人を思へば

ワクチンを残さず早く届けんと励む人らのいたつき思ふ

京都市 一三三 朋子

元始よりあまた国難乗り越えし国柄今ぞ再びと思ふ

コロナ禍に改めて知る当然と思ひしことの稀有なることを

乃木大将の功に感ずる魂を語り継ぎなむ後の世代へ

一筋に生きたればこそ迷ひなく殉じたまひき君を慕ひて

昭和帝「院長閣下」の薫陶か民慰むる旅路遙けし

友どちと囲炉裏の熾火おきび囲みつつやをら語らふひと時安し

一回目のコロナワクチンを打ちに近所の町医者に行きし時

病院でワクチン待てる人々の如くに我も老いしかと思ふ

年ごとにいとしくなりし舅ともつひに別れの時ぞ来たれる

高齢の人々送りもの悲し時代の流れしみじみ思ふ

子を持ちて今に至れる自分知り親を看取りて死に至るを知る

十歳になりし息子の誕生日に出生の日の記憶を辿る

吾子あこ抱く腕かひなよりじわり温もりの伝はりて来ぬ健気なるかも

凶らずも出でし言葉は「あつ軽い」生あれ来る前に考へをりしも

居酒屋で一人しみじみ祝ひ酒味はひたるを忘れかねつも

あの日からもう十年も経ちしかと思ひて吾の心満たさる

母の一周忌を迎へ、かの日を思ひ返して

彦根市 轟 晃成

神戸市 藺田美浩

大阪市 板西雅代

明石市 細谷真人

加古川市 北村公一

「お母さん、来たよ」と言ひて手を取ればその手にいまだ温もりありき

常ならば我が呼びかけに目を開けて「来てくれたの」と答ふる母は

安らかな面輪は眠りたるごとく亡くなりしとは信じかねつも

骨と皮ばかりに瘦せたる母の手のその温もりは忘れ難かり

好物のメロンやスイカ目にすれば見舞ひて食べさせし日々の愛しき

聖徳太子千四百年遠忌記念特別展「聖徳太子と法隆寺」にて

聖徳太子が使はれたと言はれる硯と法華義疏の巻物を見て

豊中市 布瀬雅義

目の前の丸き分厚き硯すずりこそ聖徳の皇子みこの使はれしものか

乱れなく文字のならべる法華義疏もこの硯横に書きたまひしか

をちこちに字を直されし跡ありて皇子かむがの考ふ姿偲おもはる

我が師らが長年集ながとしひて注釈をまとめし義疏ひもとのこれぞ原文もとしふみ

このわれもいつかこの義疏紐解ひもときて皇子と我が師の御跡追ひたし

近くでキジバトの鳴き声を聞く

神戸市 天本和馬

朝早く声に惹かれて見渡せば電柱の先で声ひけらかす

さ思はば数日前よりキジバトの声クークーと啼きてありけり

昼時は庭のカエデに入り込み姿隠して声張り上げぬ  
こはいかに去年造りし古き巢の上に止りてしばし離れず  
昨年は営巢の後幾日か二羽で交互に卵あたたためしが  
天敵に襲はれたるか帰り来ぬ一羽を待ちて長く留まる  
何処かへ飛び去りし巢に卵二つ残りてあるも悲しかりけり  
こひ願ふこの古き巢に帰り来て卵孵せよ今年こそはと

父の日

交野市 絹田洋一

社会人になりて家を出し三男より花屋の箱の宅配届きぬ  
花なれば母への贈り物ならむとあらためもせずつち捨て置きぬ  
父さんへの贈り物ならずや父の日も近づきたればと長男言へり  
父の日はいつやも知らず調べたれば六月第三日曜日あす  
箱の上の小窓ゆのぞけば小さき葉のあまた見えたり急ぎ開けゆく  
三男の送ってくれしは盆栽の石抱き楓と感謝のカード  
おもしろし木の中程に細き幹のうねり絡みて石を抱きたり  
苔の青も鮮やかに見ゆ初めての庭の盆栽にけふも水やりぬ



父の誕生日に寄せて

宝塚市 庭本秀一郎

平成を迎へし頃の父の歳に我もなりしと気づきたりけり  
バブル弾け時代の潮目変る中如何に未来を見をりしか父は

《主会場》

令和三年八月二十八日（日）

合宿教室で学生と共に学びて

全日本学生文化会議 清川信彦

真剣な眼まなこで己が胸内を語る友らに我が身正さる

初に会ふ友らと再び集まりて心ゆくまで語り合ひたし

志高き友らに負けぬやう今日より励まむ学びの道に

元（株）講談社 磯貝保博

様々に工夫ほどこす会場に心強しや友ら集ひぬ

元日本ユニシス（株） 大町憲朗

なつかしき友ら集ひて合宿の学びの場にあることのうれしき

北で待つ友らに今日の感動を伝えることに努めゆきなむ

元富士通（株） 古賀智

われもまた大御寶の民なれば國の肇めに思ひいたさむ

伊勢雅臣講師の講義を聴きて

元(株)講談社

藤井 貢

「上和ぎ下睦びて」てふ御言葉を「和」の有り様と示さる君は

「一隅を照らす」といひし最澄のみ言葉仰ぎ歩みゆかなむ

江崎道朗講師の講義を聴きて

血迷ひし宮沢談話反対と街頭に立つ君の凄さよ

愚かなる首相の訪中阻止せんと機動隊ともやり合ふ君は

元三菱重工(株)

島津 正 數

齒切れよく熱意あふるる言の葉で国際情勢学ぶは嬉しき

〈福岡サテライト会場〉

江崎道朗先生の御講義を聞きて

元マツダ(株)

久々宮 章

師の君のみ教へ守り言論の難き戦いくさに挑み給ふも

日章工業(株)

藤新成 信

とまどひと緊張の中に始まりしリモート合宿は無事に終りぬ

サテライトにて班別討論も行はれ合宿教室の目的果されぬ

各地区のあまたの人ら繋ぎ合はせ大きな輪となり合宿となす

(株)寺子屋モデル講師 武田 真理子

じょうもんの祈りと感謝の心知り改めておもふやまとのこころ

〈北九州サテライト会場〉

医療法人豊司会新門司病院 森田 仁士

江崎道朗先生の御講義をリモートでお聴きして

パソコンゆ聞え来る声気迫満ち今この部屋に居ますがごとし

同窓の友 元福岡県立高校教諭 小野 吉宣

若き日ゆ共に学びし同窓のみ友の助言いまに忘れじ

ともすれば閉ざしがちな窓を開け勤めはたさむ生あるかぎり

ともすれば閉ざしがちな窓を開け大空仰ぎ豊かに生きむ

江崎道朗先生の御講義を拝聴して 元福岡県立高校教諭 堀田 眞澄

みづからの学生時代を語りますその顔かんはせの若やぎて見ゆ

後生は畏るべきかな若きより悟りたまふか臨済將軍

なかなか悟りを得ずに迷ひをる我は口惜しき曹洞農夫

〈熊本サテライト会場〉

江崎道朗大人の講話を聴きて

(株)ライフプラザパートナーズ

河崎 由紀夫

おとなしと思ひたりしがげに赤き心をもてる大丈夫と知る

若き日の師との出会ひは大丈夫のころざしをも立てしむるかな

あたなるをそしるのみでは益あらで國のありやうまづは正さむ

あふぎあふ外国ともにむつびあひ榮えゆくこそ大御心ぞ

〈茨城サテライト会場〉

江崎道朗先生のご講義

(株)日立製作所

松井 哲也

真剣に叱りてくれる師の君と出会ひしことを語りゆかるる

「知らぬから質問せし」とふ言の葉に思はず笑みを返されしといふ

拙かる問ひに籠れる真摯なる思ひをしかと受け止め給ひぬ

師の君と出会ひて今の我ありと語りゆかるるすがた尊し

オンラインで臨みて

筑波大学大学院

横川 翔

をちこちに離れて住まふ人びとの画面越しにてつどひけるかな

〈運営本部〉

合宿が無事終はりて

(株)アイセルネットワークス

最知浩一

コロナ禍の中にありてもみ友らがあまた集ふを嬉しく思ふ  
今年こそ開催せむと幾たびも準備かさねて今日を迎へり  
初めての試み多き合宿も無事に終はりてこころやすらぐ

元(株)アルバック

北濱道

様々な障りを越えて今日の日のいとなみ得しは有難きかな

暇なき日々さまさむにお心を籠め尽します先輩(池松伸典さん)の尊し

江崎道朗先生の御講義をお聴きして

一般社団法人日本港運協会理事 久米秀俊

昭和史を学べとの師(小柳陽太郎先生)の宿題に応へて三十年努め給ひしとふ

緒方竹虎おがたうしの生涯たどられし御著作に籠めらるる思ひのしのばるるかも

我が国は「志のバトン」を引き継ぎて成りしとのお言葉心にひびきぬ

江崎道朗先生

国民文化研究会理事長 小柳志乃夫

学問を師に鍛へられし若き日の思ひ出しみじみ語りたまひき

自身の中に学問的基盤を作るべしと若きらに強く語りたまへり

我が国の回復は即ち学問の回復にありとさとしめられつ  
短歌を詠む研修のなき合宿は残念なりとのお言葉忘れず  
励ましの御心頂き我らまた共につとめむ学びの道に  
力足らざる我らなれども学問の道統つぐべく励みて行かむ

○  
コロナ禍の中に一日の集ひなれど開きし甲斐あり感想文読みゆけば

《主会場》追補企画

〔明治神宮参拝と短歌創作体験〕令和三年十月二十三日（土）

第一班

明治神宮の参道を歩みて

一般社団法人日本港運協会理事

久米 秀俊

繁りたる木々に囲まれし参道に木もれ陽さやかに照り映ゆる見ゆ  
たけ高く繁れる木々に百年の守り人の功俥ばるるかも

乾燥し荒れたる土地はも全国ゆ寄せられし木々で森となりしとふ

東京大学教養学部 二年 蒲池 海斗

戦災に見舞はれしことのありといふも今静かなる宮へ参りぬ

戦火より宮居守らんと努めたる人らのいたつき思ひ遣るなり

大空に届くが如き大太鼓思はず我は姿勢正せり

先人の努力繋ぎし神宮に流れし思ひ継がむとぞ思ふ

全日本学生文化会議

清川信彦

空襲時御霊代をば遷せしとふ宝物殿を訪ね得しかも

己が身をかへりみずして御霊代守りたまひし御心尊し

会社員

野々村美紀子

静かなる玉砂利の道歩みつつ明治の御代に思ひをはせる

久しぶり集へる友らの変らざるがしき顔を嬉しく眺む

船橋市立小学校教頭

竹内孝彦

団栗の一つと採らず掃きもどし育まれ来し百年の杜

国内より十万本の献木の百年にして原始の森に

御霊代遷し奉りし宝物殿取材するとて吾兄あせ(鶴野光博講師)急ぎ発つ

元団体職員

嶋田元子

木々の葉の舞ひ散るさまを眺めつつ友らの帰りを一人待ち居る

吹く風に空の色にも冬の日の訪れ近きを覚ゆる今日かな

国民文化研究会事務局長

飯島隆史

ことそぎし明治神宮正殿に友らとともに頭垂こうくれたり

三十名老いも若きもならびきて明治神宮詣でたりけり

大楠の右に左に繁り立つ明治の宮は心すがしき

七五三結婚式に宮参り秋深き日は晴れ渡りけり

雲一つなき大空を仰ぎつつここに集ひし人は明るき

元神奈川県公立小学校教諭

松本洋治

をちこちゆ寄進によりて造られし明治の杜はかがやきてあり

百年ももとしせの時を重ねて生きてある木々のそよぎは神の如くに

元拓殖大学日本文化研究所客員教授

山内健生

「全国物産奉献品」(明治神宮境内にて)を拝観して

必ずや故里の品あるべしと新潟県の名まづは探しぬ

数々の品ある中に「魚沼の黄金もち」目にして嬉しかりけり

すぐ横に「八海山」の一升瓶二本があれば猶もうれしき



新潟の「ぬれせんべえ」の袋詰め隣りにありてさらにうれしも

なりはひに勤しむ人らの産み生なせる品々あまたここに集ふか

をちこちの同胞あまたが努めたる「宝」のごとき品々尊し

わが里（魚沼）の人らの搗きし「餅」ありて仰ぐもうれし奉献品は

## 第二班

明治神宮参拝

元東急建設（株） 奥 富 修 一

拝殿に太鼓の音は響き来て神のみ前に頭を垂れぬ

「百年の社」の樹々より洩れる陽を美しと見つ深まる秋に

肩に落つるとんぐりの実を手を受けて参り路をゆく友らと共に

東京大学教養学部 二年 渡 邊 蒼 生

その昔戦火を避けて守りこし人の心は今も変はらず

本殿に踏み入りたれば間近にも御霊いますと思はれにけり

神宮へ参り来る度よみがへる「誠」詠ませし大御歌はも

※（御製）とき遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものは誠なりけり

代々木公園駅にて佐川友一兄と再会 元音楽大学講師・作曲家 武 澤 陽 介

改札に久しく会はぬ先輩を見てセンター行きともの楽しくなりぬ

神宮参拜の折、婚礼準備に來し友人と偶然に出会ふ

自営業

小林充明

愕ける友への祝言賀する日は明治の君や引き合はすらむ

神宮にて七五三を祝ふ子を見て

覆はるるマスクの中でいやがるも千歳の飴をしかと掴めり

明治神宮散策

元(株)アルバック

北濱道

美しく晴れわたりたる青空を仰ぎて明治の宮ををろがむ

夫婦楠見上ぐる巨おほき木の様に明治の御代の姿偲びぬ

久米秀俊兄の「短歌創作の手引き」を聴きて

若築建設(株)

池松伸典

御歌詠むことの大事を語りゆく友の言葉の胸にしみくる

わづかなる時の間なれば的を得て語る話のすばらしきかな

明治神宮にて

さはやかな日射しあびつつ友どちと緑さはなる神宮めぐりぬ

元富士通(株)

古賀智

雨あがりの代々木の宮にたたずめば森の緑は濃さまさりけり

鶴野光博兄の講話を聴きて

元(株)講談社

藤井

貢

一とせ半連載なされし神宮を語りし友のみ姿うれしも

明治神宮正式参拝

大太鼓鳴り響きます拝殿に友らと集ひかしくみ参る

境内散策の折に

菊薫る候となりしか全国ゆ奉納鉢のさはに飾らるる

明治神宮参拝の折に

元(株)みずほ信託銀行

大泉英哉

氷雨止みし神宮の森に詣づれば抜けるが如き青空眩し

雲一つなき高空たかぞらに日の丸の旗ははためく明治の宮に

### 第三班

「奉遷の儀」の話を聴きて

元IHI(株)

内海勝彦

空襲の災ひさけむと御霊代の奉遷の儀を決意せりとふ

八人の神職集ひ次々に奉遷の儀の執り行はる

一時いつときの余裕なき中ねんごろに遷し給へる様浮かびくる

本殿に急ぎ返れば拝殿は崩れおちけりわづかの時に

建て替ふる本殿の姿目にすれば遷せし人のいさをし思ふ

苑内散策

きのふまで曇りし空も今日晴れて明治の森に秋日さしけり  
雨ふらば散策いかむと案ぜしも無事終はりたることの嬉しき  
くさぐさに準備重ねし友どちのいたつき思へば頭さがりぬ

明治神宮参道を歩きて

ヤフー(株) 高橋 俊太郎

空襲の炎に耐へて育ちたる木々秋空に高くそびゆる

秋晴れの光に映ゆる緑葉の色残したくシヤッターを押す

鵜野光博君の明治神宮についての講話を聴きて

茨城新聞社 佐川 友一

神宮の歩みを詳しく調べたる君の話に耳傾けぬ

「民間の力」ありてこそ百年を生きる礎築かれしとふ

明治とふ明るき時代の精神を現代に受け継ぐ宝にしたし

鵜野光博さんの講話を聞きて

(株)アイセルネットワークス 最知 浩一

国民の帝に寄せるまごころを友は詳しく話し給ひぬ

外苑は国民の健康希はれし帝の思ひの込められし場所とふ

ひととせ半歳月かけて取材せし友の講話を有難く聞く

国民文化研究会理事長

小柳 志乃夫

神宮の森の上青く晴れわたる秋空仰ぐ心すがしき

特別参拝

友皆と参拝終へし広前に風さはやかに吹きわたたりたる

帰途

二人して何語るらむ参道を行く若きらの姿ともしき

明治神宮特別参拝

東京短歌の会

野々村 悦子

秋深き明治の杜の拝殿に太鼓響きてわれらぬかづく

拝殿にかしは手ひびき小柳理事長と国のさかえを願ひをろがむ

荘厳な宝物殿の広庭にあきつ飛びかふ秋の日の午後

鶴野光博講師の講話を拝聴

神宮は明治の御代の人々の帝を敬ふ思ひと学びぬ

講話にて、明治帝の遺徳を偲ぶ各地からの誘致を経て全国

からの献木と勤勞奉仕によりて荒れ地に造林されたと学びて

公益法人役員

中村 正則

人々の熱き想ひと勤勞奉仕を集めて繁る百年の森

同じく、外苑の運動施設は明治帝の尚武剛健の氣風に基づくと学びて

外苑に生きる帝の思し召し民の心を今にうるほす

正式参拜の大太鼓の響くを聞きて

紺碧の空に拡がる大太鼓コロナ払はむ祈りをのせて

元(株)講談社

磯貝保博

大太鼓打ち鳴らす音は胸内に響き来たりて身のひきしまる

七五三詣の光景

御社殿に向ひて祈る幼な子の晴れの姿に心なごめり

国民文化研究会顧問

今林賢郁

ま青なる秋のみ空ははてもなくすみわたりたり雲も流れず

## あとがき

令和三年の第六十六回「合宿教室」は、ウイルス感染症の先が見えない中で、「宿泊研修」の次善の形として、関西会場では七月三日（土）、四日（日）の日帰り二日の研修を行った。主会場（於・東京）では八月二十八日（土）及び十月二十三日（土）のそれぞれに日帰り一日の研修を実施した。ウイルス禍のために制約を受けた開催とはなったが、例年同様、学問・人生・祖国の一体的把握を目指して研修は営まれた。本冊子はその折になされた内容を収めたものである。参加者各位には本冊子をお読みいただき、わが国のあるべき姿を尋ねる学びの指針として活用されんことを願ふ次第である。

さて、令和四年の「合宿教室」については、ウイルス禍の先が読めない現況ではあるが、今のところ、東京都八王子市の「大学セミナーハウス」に於いて、九月二日（金）から四日（日）までの二泊三日の日程で従前同様の「宿泊研修」の形で開催したいものと、鋭意計画してゐる。招聘講師、具体的な日程の詳細については、本会のホームページ及び月刊『国民同胞』等でお知らせする。多くの学生・社会人諸氏のご参加をお待ちしてゐる。

令和四年三月二日

編集委員 山内 健生

北濱 道

——日本への回帰——  
(第57集)

令和四年三月十日発行

頒価 九〇〇円

編者 大学教官有志協議会

公益社団法人 国民文化研究会

編集委員代表 小柳志乃夫

発行所 公益社団法人 国民文化研究会

〒一五〇—〇〇一 東京都渋谷区東

一—一三—一—四〇二

TEL (〇三)五四六八—六二三〇

振替〇〇一七〇—一—六〇五〇七

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします。



